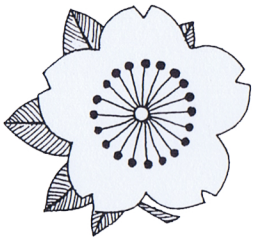
RI*WAC
Research Institute for Women and Careers
日本女子大学現代女性キャリア研究所

RIWAC 管理番号	RJO0006
調査タイトル	桜楓会設立 80 周年記念・会員調査
論文／雑誌名	「四万人の桜楓会員はいまー」 『桜楓会八十年史』
著者	編集委員会
掲載ページ	pp.407-502. pp.572.-581.
発行年	1984.04
出版社	社団法人桜楓会

桜楓会八十年史



目次〈桜楓会八十年史〉

カラー　桜楓樹
オフセット　歴代会長・理事長／写真で見る桜楓会史

『桜楓会八十年史』の発刊によせて　日本女子大学学長　社団法人　桜楓会会長　青木　生子　3

桜楓会の現状と将来への期待　社団法人　桜楓会理事長　竹中はる子　7

『桜楓会八十年史』発刊を迎えて　出版委員長　村瀬　繁子　16

I　桜楓樹のもとに

一、桜楓会の理念――成瀬仁蔵先生の残された道――　社団法人　桜楓会　元理事長　野見山不二　21

二、桜楓星座　社団法人　桜楓会前理事長　氏家　寿子　31

II　桜楓会の歩み

第一章　芽生えのとき・明治三十六年～

1桜楓会の成立48　2創業時代56　3『家庭週報』の発刊61　4桜楓館建設67　5桜楓会の事業72　6桜楓会修養会「天心団」の結成111　7成瀬先生の永眠114

第二章　発展のとき・大正八年～
1麻生先生を会長に迎えて122　2社団法人「桜楓会」成立124　3母校総合大学建設の歩みと桜楓会127　4桜楓会の社会事業130　5関東大震災と桜楓会138　6国産品奨励展覧会と女性文化展への協力144　7「母の会」設立と「母の日」運動150　8桜楓会継承への道・井上秀校長の就任153　9桜楓会充実のための組織強化157　10成瀬先生記念のための事業159　11母校西生田移転と桜楓会168　12戦時下母校の行事とともに174　13戦線拡大から決戦態勢へ179　14決戦下の母校とともに183　15総会中止と家庭週報の休刊189　16終戦への道204
第三章　新生への道・昭和20年～
一、桜楓会の新しい使命206
1敗戦の混乱のなかで206　2『家庭週報』から『桜楓新報』へ218　3悲願日本女子大学の誕生224　4母校通信教育事業への協力232
二、桜楓会の発展
1桜楓会創立五十周年から日本女子大学桜楓館完成まで251　2桜楓学園開校から桜楓館別館建設まで262　3桜楓日記発行から桜楓会奨学金設定まで268
三、生涯教育を目指して
1創立者の教え277　2夏期大学の開催283　3家庭工芸展開催289　4生涯教育への道294

III 桜楓会の現状
1 定款 320　2 役員・職員名 326　3 昭和58年度 各部活動の記録 328　4 支部の活動 345
5 支部長・副支部長名簿 380　6 学内会員 394　7 昭和58年度会員数 404

IV 四万人の桜楓会員はいま——
はじめに 407　1 結婚・職業・社会活動・生涯教育・関心について 412　2 桜楓会について 463　3 設立81年を迎える桜楓会への期待 497

V 資料編
1 桜楓会の組織(明治37年設立時) 504　2 社団法人・桜楓会定款(大正8年社団法人決定時) 506　3 歴代・役員名簿 511　4 歴代職員名簿 522　5 桜楓会の奨学金受賞者一覧 524
6 大正・昭和の桜楓会会員の職業の移りかわり 528　7 『家庭週報』から『桜楓新報』最新号まで 532　8 年表 542　9 桜楓会設立80周年記念・会員調査用紙 572

編集後記
付・桜楓会会員の推移
桜楓会費の推移

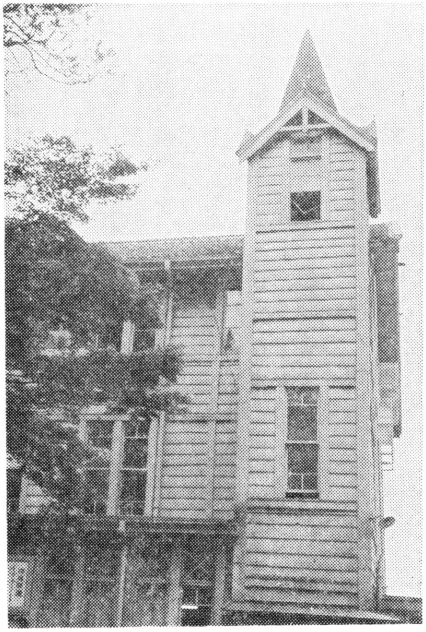
題字・竹中はる子

IV

四万人の桜楓会員はいま

――

桜楓会設立八十周年記念会員調査



一　はじめに

桜楓会は成瀬仁蔵先生がその生涯を賭けて説かれた「生涯教育」実現の場として、明治三十七年設立された。それはまた一回生の「母校の精神をあらわして、女子の為めに、国の為め、己のが身を捧ぐるの心は、止まざるべけれど、さりとてこの志を同じうする輩も、常に互に相計り、相学びて進む」ために設立を望んだ、熱意の賜でもあった。

以来八十年間、桜楓会は成瀬先生の示された桜楓樹の理想に向かって、「社会のため、母校のため、会員のため」休みなく活動をつづけてきた。

明治期の『家庭週報』の発行、通信教育の源ともいうべき「日本女子大学通信教育会」の設立、大正前期の託児所の開所、関東大震災時の救援活動、昭和初期の夜間女学校の開校……など、それらは常に時代に先がけた活動であった。

昨今社会的に大きな問題として取り上げられている「青少年問題」も、すでに大正六年には「青少年の信念を如何に涵養するか」のアンケート調査が行われ、児童、青少年問題が研究課題として取り上げられるなど、次代を考え、次代に備えての考察が行われていた。

第一次世界大戦、第二次世界大戦……そうした混乱の時代を経て、戦後、桜楓会は戦乱による打撃から立ち直り、再建への道を懸命に歩んできた。消息不明会員の確認、桜楓館の建設、桜楓館別館の建設と、基盤づくりを終え、成瀬先生の目指された「生涯教育」の実現に向けて、桜楓会は努力をつづけている。

そうした中、八十周年を迎えるに当たり、創立の原点にたち還るべく『桜楓会八十年史』の出版が計画された。過去をふり返ることが、単なる郷愁に終わることなく、明日に向けての展望であることは当然であるが、その展望をより確かに、より豊かにするために、会員の総意を求めて「アンケート調査」を計画した。

二　調査概況

1　目的

会員は桜楓会の活動にどのように参加し、桜楓会に何を期待しているのだろうか。八十一年に向けての提言をそこに読みとりたい。また、日本女子大学に学んだことが、日々の生活の中にどう息づいているか跡づけたい。

2　調査期日

昭和五十八年八月一日～九月十日

3　調査対象者

明治三十七年卒業・第一回生より、昭和五十八年三月卒業・新制第三十三回生まで桜楓会名簿記載者、四万三千八百人より、無作為抽出により、ほぼ一割余の四、四二〇名。調査対象者の内訳は第2表に示すとおりである。また、対象者が年代的に長期にわたるため、これを六期に分類した。（表3参照）

〈第一期〉　一回生―二十八回生

桜楓会設立当初より、日本女子大学創立時の雰囲気が学内に充ちる成瀬、麻生校長時代。

〈第二期〉　二十九回生～四十八回生

桜楓会より初の「継承者」として校長に就任した井上秀校長時代。戦時下に学生時代を送った回生が多い

〈第三期〉　新制一回生～十回生

日本女子大学校が大学に昇格し、新制度のもとに学生々活を送った回生層。大橋広、上代タノ学長時代。

〈第四期〉　新制十一回生～二十回生

日米新安全保障条約調印により、各地に反対運動が展開された激動の時代。

〈第五期〉　新制二十一回生～二十六回生

各地に大学紛争ひろがり、日本女子大学もその影響の大きかった時代。有賀喜左衛門、道喜美代学長時代。

〈第六期〉　新制二十七回生～新制三十三回生

入試制度の改革により、五教科から三教科へ。道喜美代、青木生子学長時代。

三　調査方法

質問紙法により、本人に直接郵送し、配布四十日後を回収日とした。

調査票発送部数	四、四二〇
有効回数部数	二、〇八六
返却部数	二七六
無回答部数	一六

回収率　五一%

集計、製表方法は、コーディング作業後、ほとんどの部分を機械集計により、自由記述の部分を手集計で集計した。なお、科別回答者数は表3のとおりである。

第1表　科別回答者数

学科＼回生		1期 1回～28回	2期 29回～48回	3期 新1～10回	4期 新11～20回	5期 新21～26回	6期 新27～33回	計
家政学部	家政	69	127	—	—	—	—	196
	教師範	42	211	—	—	—	—	253
	社会事業	14	43	—	—	—	—	57
	児童	—	—	25	28	21	25	99
	食物	—	—	29	29	25	35	118
	住居	—	—	13	22	22	28	85
	被服	—	—	12	26	18	17	73
	家政経済	—	—		9	21	30	60
	理1	—	—	13	24	21	39	97
	理2	—	—	8	11	11	21	51
文学部	国文	15	98	32	40	34	41	260
	英文	18	54	51	42	28	54	247
	史学	—	8	19	20	14	23	84
	教育	—	—	6	19	21	36	82
	社会福祉	—	—	23	22	16	29	90
	特志	4	12	4	—	—	—	20
	高等	—	—	—	—	—	—	—
	本科	—	—	—	—	—	—	—
通信学部	通信	—	—	52	61	39	62	214
計		162	553	287	353	291	440	2086

桜楓会80周年記念・実態調査について

1）回収結果

第2表

発送総数	4,420
返却	290
有効回収数	2,086
回収率	51%

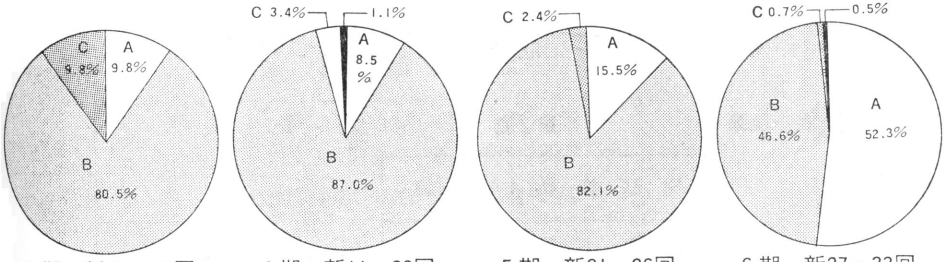
（無答を14含む）

2）期（回生区分）

第3表

期	回生	卒業年次	発送数	回答数
1　期	1回～28回	明治37年～昭和6年	387	162
2　期	29回～48回	昭和7年～昭和26年	1,038	553
3　期	新1回～10回	昭和27年～昭和35年	561	287
4　期	新11回～20回	昭和36年～昭和45年	795	353
5　期	新21回～26回	昭和46年～昭和51年	746	291
6　期	新27回～33回	昭和52年～昭和58年	893	440

A未婚　B既婚　C既婚（配偶者と離別、死別）



3期・新1～10回　4期・新11～20回　5期・新21～26回　6期・新27～33回

第一　桜楓会員の生活状況

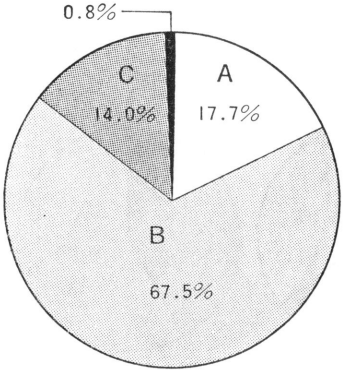
一　結婚について

まずはじめに、結婚をしている会員はどの位いるのだろうか。

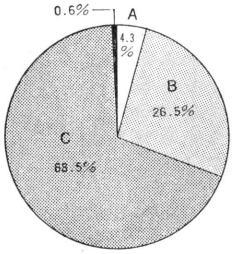
1　結婚の有無

表4に示すとおり、全体の既婚率は八一・五％で約八割の会員が結婚の経験を持っている。その内「現在、配偶者がある」と答えた会員はその約

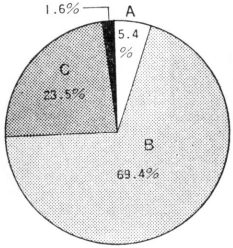
4期（新11回～20回）	5期（新21回～26回）	6期（新27回～33回）
353	291	440
8.5	15.5	52.3
87.0	82.1	46.6
3.4	2.4	0.7
1.1	—	0.5



結婚について



1期・1～28回



2期・29～48回

三分の二にあたり、「配偶者と死別、離別」の会員は一四・〇%である。また未婚の会員は二割弱となっている。〈上図1〉

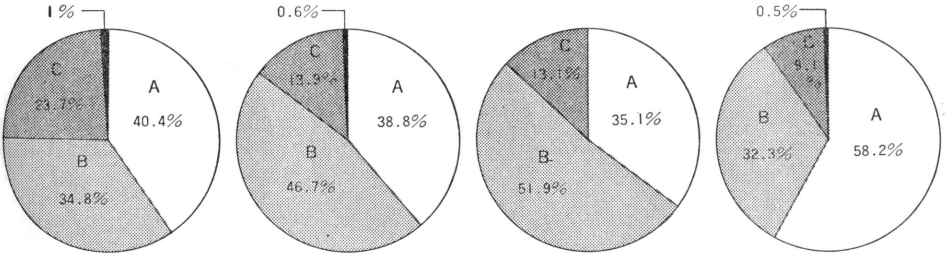
これを期別でみると、七十五歳以上の高齢者層である第一期（平均年齢八十八歳）では九五・〇%、中高年層の第二期（平均年齢六十五歳）で九二・九%、中年層の第三期（平均年齢五十歳）で九〇・三%、同じく中年層の第四期（平均年齢四十歳）が九〇・四%、若い第五期（平均年齢三十歳）が八四・五%、最も若い第六期が四七・三%とほぼ漸減のカーブを描いている。（図1参照）これから結婚する者の多い若い第五、第六期の比率が年長者に比べて低いのは当然であろう。

次に未婚者についてみてみると、第一期が四・三%、第二期が五・四%、第三期が九・八%と徐々に増え、第四期が八・五%でわずかに減少、第五期が一五・五%、第六期で五二・三の高率となっ

第4表　結婚の状況

回生 ＼ 結婚の形態	総数 2,086		1期（1回～28回）	2期（29回～48回）	3期（新1回～10回）
	実数	%	162	553	287
未婚	370	17.7	4.3	5.4	9.8
既婚（現在，配偶者がある）	1,409	67.5	26.5	69.4	80.5
既婚（配偶者と死別・離別）	291	14.0	68.5	23.5	9.8
無答	16	0.8	0.6	1.6	—

A就職している　B過去に就職した事がある　C就職したことがない　←無答



3期・新1～10回　4期・新11～20回　5期・新21～26回　6期・新27～33回

ている。

なお、昭和五十五年の国勢調査と比べると各期とも未婚率がわずかに高い。特に、第一期では、全国調査の三倍以上になり、高等教育を受けた女性の生き方の一つを示しているといえよう。

二　職業について

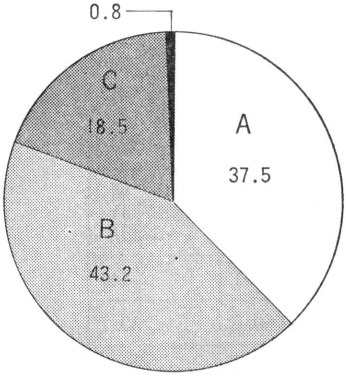
次に、桜楓会員の職業活動について調査した結果を述べてみよう。

1　現職の有無

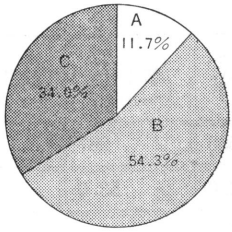
「現在、職業に就いている」と答えた有職者と「現在、職業に就いていない」と答えた会員が、どの位の比率になっているかを示したのが表5と図2である。

六期を通じて「現在、職業に就いている」会員は二、〇八六名中七八二名で、全体の三七・五%に相当する。会員の中のほぼ四割が有職者といえ

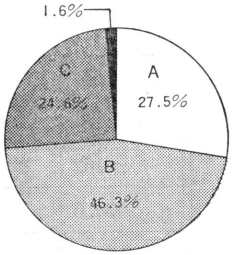
4期（新11回～20回）	5期（新21回～26回）	6期（新26回～33回）
353	291	440
38.8	35.1	58.2
46.7	51.9	32.3
13.9	13.1	9.1
0.6	—	0.5



就職の有無



1期・1～28回



2期・29～48回

る。しかし「現在、職業に就いていない」と答えた専業主婦や学生など一、二八八名中、一七五名がパートやアルバイトの仕事をしていることが、質問16の(二)（五七六頁参照）の集計結果でわかった。それらを加えると全体の四五%強が、何らかの形で仕事を持っているということになる。

さて、現職を持つ会員（七八二名）を期ごとにみると、第一期（平均年齢八十八歳）が一一・七%、第二期（同じく六十五歳）が二七・五%、第三期（同じく五十歳）が四〇・四%、第四期（同じく四十歳）が三八・八%、第五期（同じく三十歳）が三五・一%、最も若い第六期が五八・二%となっている。

若くて未婚者が多い第六期で六割近い高率を示しているのは当然といえるが、七十五歳以上の第一期に一割以上の有職者がいるのは注目に値する。〈上図2〉

第5表　現職の有無

就業経験＼回生	総数		1期（1回～28回）	2期（29回～48回）	3期（新1回～10回）
	実数	%	162	553	287
現在職業に就いている	782	37.5	11.7	27.5	40.4
過去に就職していた	902	43.2	54.3	46.3	34.8
就職したことがない	386	18.5	34.0	24.6	23.7
無答	16	0.8	—	1.6	1.0

%

1　期（1回〜28回）	2　期（29回〜48回）	3　期（新1回〜10回）	4　期（新11回〜20回）	5　期（新21回〜26回）	6　期（新27回〜33回）
162	553	287	353	291	440
34.6	58.0	53.0	58.4	60.5	30.7
—	0.2	0.3	0.3	—	2.5
1.9	0.2	0.7	0.3	1.0	5.0
51.9	14.1	5.6	2.3	3.4	3.6
11.7	275	40.4	38.8	35.1	58.2

また、第二期はすでに多くの会員が定年を迎えているものの、三割近い有職者を数え、これまた、高齢者の健闘振りをうかがわせる。

中年層の第三期の有職率（四〇%）よりも、第四期（三九%）、第五期（三五%）の比率が漸減しているが、これは後の二期が子育てに手のかかる年代であるからと思われる。

一方、表6に示したように、現職を持たない会員の割合は「専業主婦」が一、〇五六名で全体の五〇・六%を占め、学生」はわずか〇・八%、「家事手伝い」は一・六%、その他（「有職者」「専業主婦」「学生」「家事手伝い」のいずれにも属さない会員）は九・五%である。

各期ごとに最も多い「専業主婦」の比率をみると、高齢者層の第一期が三四・六%と低く中高年層の第二期が五八・〇%、中年層、第三期の第四期で五三・〇%、五八・四%を示し、就学前の子供を持つ第五期で最も高い六〇・五%となり、未婚者の多い第六期が三〇・七%となっている。

第一期では「専業主婦」（三九%）を引退した会員が多く、その他（四八%）に高い比率を示している。

2　過去の就業経験

次に、「現在は就いていないが、過去に就いた経験がある」と答えた会員についてみてみると、二、〇八六名中九〇二名で、全体の四三・二%である。(表5参照)

期別でみてみると、第一期が五四・三%で最高の比率を示し、第二期が四六・三%、第三期が三四・八%と徐々に減少し、第四期で四六・七%、第五期で五一・九%と漸増し、第六期で急減し三二・三%となっている。

第一、第二期の高年齢層に過去の就業率が高いのは、定年退職した者が多いことを示すものと思われる。

ここで、「現在職に就いている」会員と「現在は就いていないが、過去に就いた経験がある」会員を加えて、過去から現在までの就業経験がどの位あるかをみてみよう。

第6表　現職の有無

生活形態＼回生		総数	2,086
		実数	%
無職	主婦	1,056	50.6
	学生	16	0.8
	家事手伝い	33	1.6
	その他	199	9.5
有職者		782	37.5

二、〇八六名の会員の中の一、六八四名(八〇・七%)、実に八割に相当する会員が就業経験を持っていることになる。「現在も過去も職業に就いた経験がない」と答えた会員は一八・五%、二割弱である。

経験者を期ごとにみると、第一期では六六・〇%、第二期が七三・八%、第三期が七五・二%と徐々に増え、第四期が八五・五%、第五期が八七・〇%と更に増加し、第六期では九〇・五%に達している。

こうしてみると、時代の変化と共に女性の就業率が高くなり、最近の卒業生においては九割近い会員が就業経験を持つに至っていることがわかる。

%

1　期 (1回～ 28回)	2　期 (29回～ 48回)	3　期 (新1回 ～10回)	4　期 (新11回 ～20回)	5　期 (新21回 ～26回)	6　期 (新27回 ～33回)
19	152	116	137	102	256
15.8	10.5	5.2	3.6	2.9	0.8
5.3	16.4	12.9	10.9	13.7	2.0
5.3	10.5	28.4	27.7	30.4	26.2
15.8	3.9	11.2	10.9	9.8	16.4
5.3	7.2	9.5	12.4	12.7	32.4
—	1.3	3.4	3.6	6.9	5.5
5.3	7.9	7.8	5.8	4.9	8.2
5.3	5.3	1.7	—	—	0.4
—	0.7	—	0.7	—	—
5.3	7.9	3.4	5.1	2.0	0.8
10.5	3.3	0.9	—	2.0	—
10.5	2.6	6.0	7.3	3.9	1.2
5.3	7.2	5.2	5.1	2.9	3.1
5.3	—	—	0.7	—	—
10.5	9.9	1.7	1.5	3.9	1.2
—	1.3	—	1.5	1.0	—
—	2.6	2.6	0.7	—	—
—	2.0	1.7	2.9	2.9	2.0

3　職業の種類

「現在、職業に就いている」と答えた七八二名の現職者に、主な職域をたずねた結果が表7である。

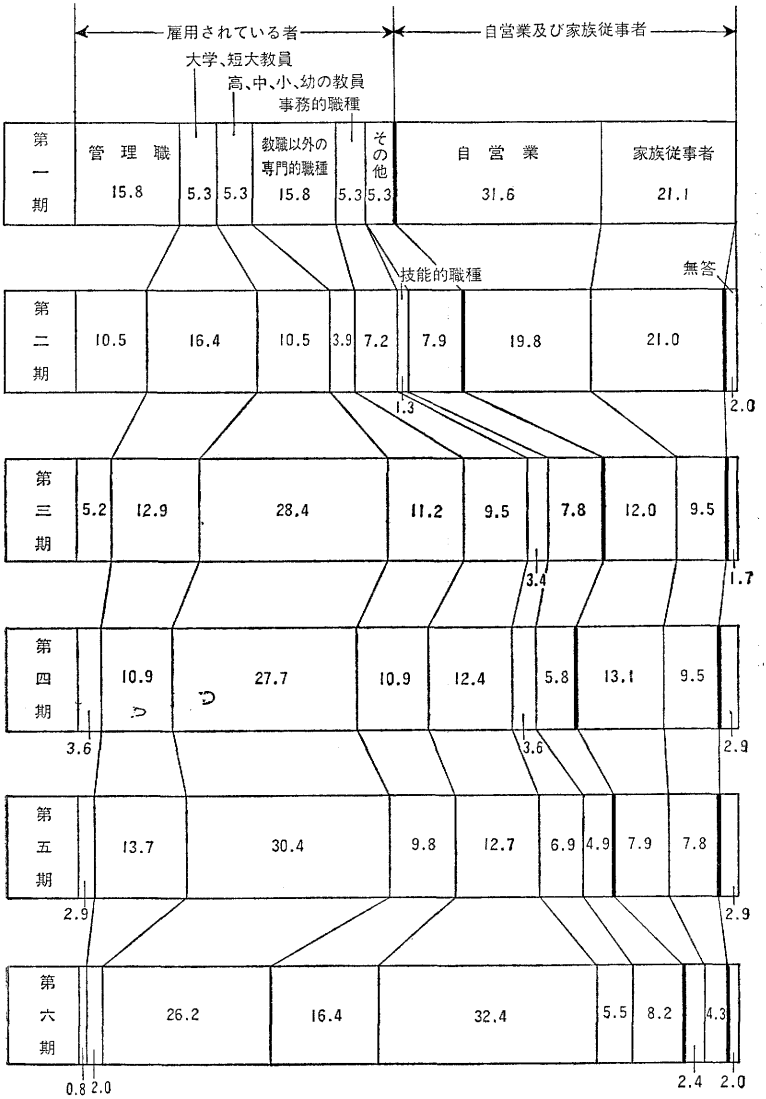
表7には、官公庁、企業、学校などに勤務する給与所得者の「雇用されている者」の職域と、自身が経営の責任者である「自営業者」及び経営者の家族で仕事に従事する「家族従事者」について、それぞれ業種を産業別にまとめて、併せて示してある。

この表からわかるとおり、有職者の約八割が「雇用されている者」であり、約二割が「自営業」または「家族従事者」である。「雇用されている者」は当然多いのであるが、高年齢層になるほど「自営業」の比率が高くな

第7表　職業の種類

職業の種類 ＼ 回生			該当者数 782	
			実数	%
雇用されている者 (609)		官公庁,企業,学校などの管理職	35	4.5
		大学・短大教員	75	9.6
		高・中・小・幼の教員	185	23.7
		前記以外の専門的技術的職業	89	11.4
		事務的職種	136	17.4
		技能的職種	32	4.1
		その他	57	7.3
自営業及び家族従事者 (161)	自営業 (82)	商・工業	12	1.5
		農林・漁業	2	0.3
		自由業	28	3.6
		サービス業	10	1.3
		その他	30	3.8
	家族従事者 (79)	商・工業	36	4.6
		農林・漁業	2	0.3
		自由業	28	3.6
		サービス業	5	0.6
		その他	8	1.0
無答			12	1.5

図3　期別にみる職業の種類



り、かつまた「雇用されている」場合でも「管理的職業」の比率が増えていることがわかる。

以下に有職者がどのような職域に就いているのか比率の高い順にとりあげ概観する。

「教職」　有職者の二三・七％を占める「高、中、小、幼の教員」と九・六％の「大学、短大の教員」の比率を加えると、三三・三％となり、有職者のほぼ三割強、すなわち回答を寄せた有職会員の三人に一人は教職にたずさわる者であるといえよう。中では高校・中学校の教員が八七名、大学・短大の教員が七五名、小学校・幼稚園の教員は四四名、各種学校講師が三〇名となっている。

高齢の第一期と若年の第六期を除く各期において、「大学・短大の教員」の比率は上位にある。例えば第二期では、有職者一五二名中二五名が「大学・短大の教員」で、一位の職種である。教職が高等教育を修了した女性にとって安定性のある職域であることを示している。

「事務的職種」　ここでは企業の一般事務系職員が一三六名とかなり多く、その他議員秘書、教授秘書なども含まれている。この職種は有職者の一七・四％であるが、実際には第六期の若い層では高くて三二・四％と三分の一近くが「事務職」であるが、第五期ですでに一二・七％と急激し、以後も漸減するので第六期以外では必ずしも高い比率とはいえない。

「教員以外の専門的技術的職種」　高度の専門性、資格、技術などを要する職種をまとめてあるので、全有職者の一一・四％の内訳は多様である。

「資格」を要する専門職として例えば、「医師」「建築士」「栄養士」「司書」あるいは「カウンセラー」などが八二名、「研究所研究員」など一五名、「記者」「アナウンサー」「プロデューサー」などマスコミ関係が一〇名入

る。なお、当然、大学での専攻と専門職との関係は深いと思われる。

「技能的職種」 職業の内容から考えて当然のことながら、年齢の高い層の比率が低く若い層にいくに従って極くわずか増えている。具体的には現在流行の「プログラマー」「コンピューター指導員や事務処理員」「原子プラント・ソフトエンジニアリング業務員」など新しい機械技術の分野にも進出しはじめていることをうかがわせる。

「管理職」 女性の管理職登用までには幾多の障害や困難があったであろう。年代を追うごとに「管理職」の比率が増し、第一期では有職者中一五・八%と最大である。「管理職である」と回答していなくても、仕事の内容についての自由記述の回答結果をみると、実にさまざまな役職に就いていることがわかる。

つぎに述べる「自営業及び家族従事者」の中にも、当然、「経営・管理的職業」に就いている役職者は多いので、これらをまとめ有職者中で役職に就いている場合を表8にまとめてある。

第8表 役職に就いている者 (実数)

役職の種類	人数
代表取締役社長	17
副社長・取締役	7
役員（部長・副部長・監査・課長）	6
係長・室長・主任・主査	15
校長・教頭・園長・院長	7
所長・塾長・事務長・寮長	6
店長・支配人	4
役付公務員（本省参事官，支部技官）	2
主事（公務員福祉職）	4
その他	3
合計	71

1人で役職をいくつも兼任している場合，その内主なもの1つを取り出した。

具体例をあげると、年長者の第二、第三期では「音楽関連事業副社長」「一級建築士事務所々長」「小学校教頭」など比較的上級の役職が目立ち、第四、第五期では「紳士婦人服販売本店々長」「旅行案内会社課長」「高校や中学校の学年主任」「老人ホーム施設長」など現在、職場の実務者として働いている。

さまざまな職場で、「方針決定」に参与する会員の多いことがうかがえる。

「自営業及び家族従事者」　この職種に含まれ者は七八二人中一六一名で二〇・六%、有職者の二割に当たり、職種全体からみると「教職」に次いで高い比率を示している。特に、第一期では「雇用されている者」との割合がほぼ同じと高いが、若い層では「自営業及び家庭従事者」の占める割合は徐々に低くなっている。

第一期の具体例では「日本書道教育学会評議員の書道家」や「自宅開業医院の小児科担当医師」「果樹園事業主」「旅館業の女主人」など専門的な技術を持った自由業者か、あるいは個人の経営者達であり、その他の期でも「老人ホームと学生会館」などを一人で経営する実業家や病院、塾、スタジオなどの経営者が目立っている。

以上、会員の職業領域への進出状況をみてきたが、教職を除いてわずかにタイピストや事務員が女性の職場とされてきた先輩たちの時代と異なり、現在は比較的容易に就職できる代りに定着しにくい企業内の状況もある。

その一方で、女性の平均寿命がのび、いつまでも老化せずに生活するためにも、適度な職業生活を志向する傾向はつよい。事実、今みてきたように、第一期の高齢者層の息の長い専門的な自由業や自営業における活躍がクローズアップされたともいえる。

「雇用されている者」にとって、さまざまな障害のある職場への定着も、今後どのように改善されていくか、関心のもたれる所である。

4　就業形態

職業への就業が常勤であるのか、臨時（非常勤）なのか、またはパート（フルタイムでない）やアルバイト（内職を含む）であるのかをみると、図4のようである。

この図から、「常勤」は有職者七八二名中の四九六名で六三・四%、六割以上を占めている事がわかる。

有職者の職業形態

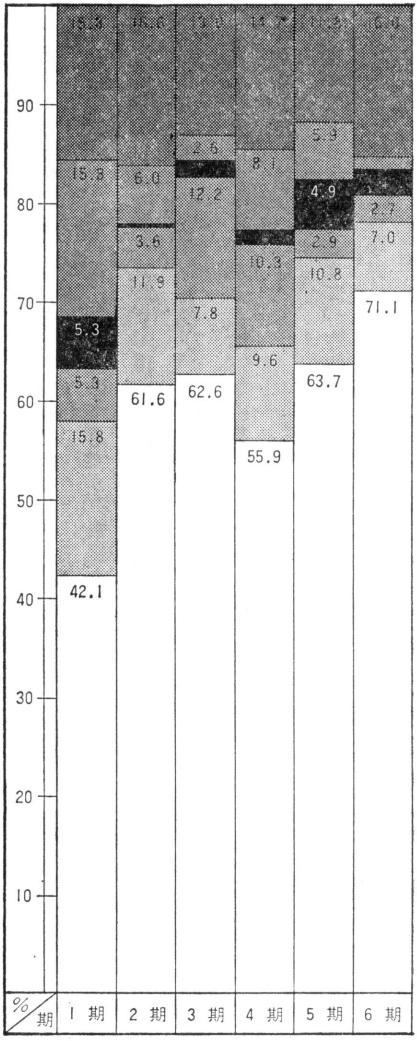


図4

%

4　期（新11回～20回）	5　期（新21回～26回）	6　期（新27回～33回）
214	189	182
29.0	25.9	36.3
67.3	71.4	58.8
3.7	2.6	4.9

また「臨時」は九・二%と一割にみたない。「パート」は五・六%、「アルバイト」は二・一%といずれも低率である。

「常勤」の比率を期別にみると、第一期が四二・一%、第二期が六一・六%、第三期六二・六%と漸次増加し、第四期で五五・九%とやや低下し、第五、第六期では六三・七%、七一・一%と漸次増加して最も高い比率を示している。

第一期で常勤が少ないのは七十五才以上の高齢者層であるためである。

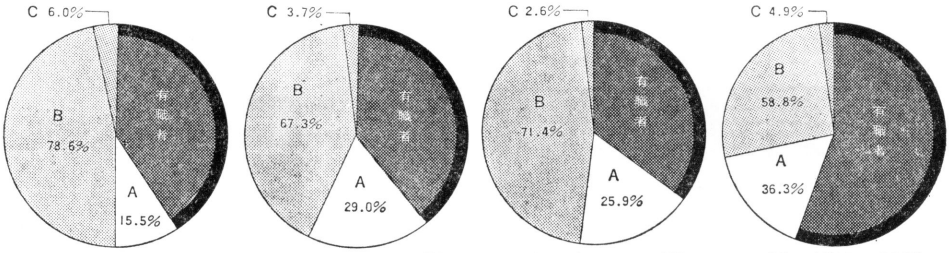
常勤の比率が最も高いのは未婚者の多い第六期で、と七割を超え、他も第四期の（五六・〇%）を除いていずれも有職者の六〇%以上になっている。

第四期には「仕事単位のフリー契約」「その都度ちがう出演契約」「家で出来る設計製図」などのように、他の期には見当らない就業形態が目につく。因みにこの期には「自由業」が多く、就業形態が定

第9表　「就職していない人」の就職希望率

就業意欲＼回生	該当者数	1,288	1期（1回～28回）	2期（29回～48回）	3期（新1回～10回）
	実数	%	143	392	168
希望している	235	18.2	1.4	7.7	15.5
希望していない	941	73.1	80.4	78.6	78.6
無答	112	8.7	18.2	13.8	6.0

A希望している　B希望していない　C無答



3期・新1～10回　4期・新11～20回　5期・新21～26回　6期・新27～33回

まらないのはそのためもあろう。第三、第四期の中年層でパートが増え、第五期でアルバイトが増加しているのが目立つ。

5　就職意欲の有無

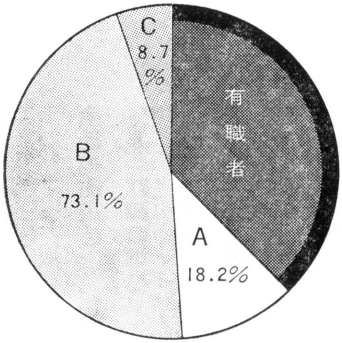
「現在職業に就いていない」と答えた専業主婦、学生、家事手伝いなど無職の会員に就職の希望を持っているかどうかをたずねた。結果は上図5に示すとおりである。「就職を希望している」と答えた会員は、一、二八八名中二三五名で一八・二%、二割にみたない。期別にみてみると、第一期は一・四%で第二期が七・七%と極めて低率で、第三期は一五・五%とやや増え、第四期で二九・〇%、第五期で二五・九%、第六期では三六・三%と最も高い比率になっている。

この推移は年齢からみて当然であり、第一期は七十五歳以上、第二期は五十五歳以上と高齢者層であり、第三期も四十五歳以上である事を考えれば必ずしも低率とはいえない。

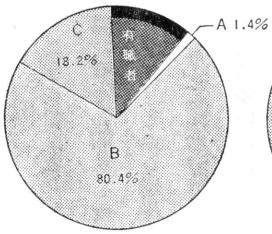
一方、若い層の中では、第六期の会員の就職を希望する比率が他の期よりも高いのは、この期が独身者の

%

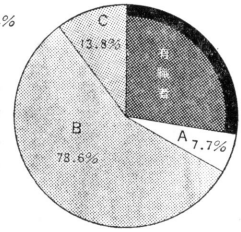
4期（新11回～20回）	5期（新21回～26回）	6期（新27回～33回）
62	49	66
14.5	6.1	12.1
1.6	4.1	13.6
8.1	4.1	7.6
27.4	26.5	33.3
37.1	42.9	32.1
14.5	14.3	12.1
4.8	4.1	—



無職者の就職希望



1期・1～28回



2期・29～48回

比率でも高いことからもうなづけよう。その他、育児に手のかからなくなった三十代後半から四十代前の第四期にも三割近くが就職を希望している事は注目される。

さて、「就職を希望しない」と答えた会員は七三・一%、七割以上に達している。高齢者の第一、第二期でかなり「年齢的に無理」の記述のあったのは、当然といえよう。

最も若い第六期でも現在無職の者の中の五八・八%は就職を希望していない。

家庭にあっても主婦としてのみ生きるのではなく、何らかの職業的な社会活動を望む会員も少なくないが、家庭の主婦として、家庭の中に

第10表　就職希望のための準備状況

回生 ＼ 準備状況	該当者数	235	1期（1回～28回）	2期（29回～48回）	3期（新1回～10回）
	実数	%	2	30	26
桜楓会人材銀行に求職希望を登録	24	10.2	—	3.3	11.5
職業安定所などの公的機関に依頼	14	6.0	—	—	7.7
恩師，先輩，知人に依頼	17	7.2	—	6.7	11.5
資格取得の準備	62	26.1	—	20.0	15.4
就職のための活動少していない	95	40.4	—	53.3	53.8
その他	31	13.2	50.0	13.3	7.7
無答	8	3.4	50.0	6.7	—

注　多答式のため100%をこえる

生活の充実感を見出している会員も多いのであろう。

6　就職の準備

就職を希望している会員は、就職のための準備をしているのだろうか。また、しているならどのような準備をしているのだろうか。

表10に示すとおり、何らかの準備をしている会員は二三五名中一一七名で四九・八%になっており、就職希望者のおよそ五割である。

これを期別にみると、第一期は五〇%で一名、第二期は四三・三%、第三期は五三・八%、第四期の六六・一%までは漸次増加して、第五期で五五・一%に減少し、第六期は七八・七%で、最高の比率になっている。

こうしてみると「就職を希望している」と答えた比率が比較的高かった第四期と第六期で、具体的に「準備している」と回答した比率もやや高い事がわかる。

では、どんな準備をしているのだろうか（表10参照）。最も多いものは「資格取得」の準備（二六・一%）であって、これは職業に対する地道な取組み方をうかがわせる。

次に多いのは「桜楓会の人材銀行に登録」（一〇・二%）であり、中でも中年層（第三、第四期）の利用度が高くなっている事を示している。

若い第六期では「その他の機関への依頼」（一三・六%）の方がわずかに「人材銀行」（一二・一%）の比率を上まわり、若い層における「人材銀行」の周知方がのぞまれよう。

「恩師、先輩、知人に依頼」（七・二%）は、中高年層の方が若い層より多い。

〃口こみ〃や〃耳こみ〃などより、広く情報をつかむ事の出来る「請負会社への登録」や「新聞の求人広告欄」「トラバーユ」などを利用する、との記述が第六期にみられ、現代的でかつ積極的な若者の姿勢がうかがわれる。

その他の具体例としては「設計させてくれる施工主をさがしている」にみられるような既に行動を開始しているものから、「ヨーガの修得があるので子供が大きくなったら始めたい」にみられるような目下待機中のもの、「滞米中なのでまず語学を修得して就職に活かすつもり」のように海外生活の中で実力養成中のものなど、若い層ほど多種多様なプランを持っていることをうかがわせる。

こうした何らかの具体的プランがある一方で、「就職のための活動はしていない」と答えた会員が四〇・四%、約四割を占めている。中高年層（第二試第三期）にとっては年齢的なハンディがブレーキとなり、第五期では育児という障害が、同じくブレーキになっていると思われる。その他「主人の転勤で具体的な計画など立たない」にみられるような、思い通りにならない女性としての障害も若い世代にはある。

7　主婦などのアルバイト

回答者の五割以上を占める家庭の主婦や学生など「職業に就いていない」と答えた会員でアルバイトをしている者は一、二八八名中一七五名であり、一割強の主婦などがアルバイトをしている。では、どんなアルバイトをしているのだろうか（表11参照）。

アルバイトの二割は「家庭教師」であり、つづいて「ピアノ、書道など趣味的な面での個人教授」、「家庭で学習塾を開いている」などがある。いずれも家庭の主婦が家に居て出来る仕事である。だが、一方で「私立高校の非常勤講師」「看護学校の非常勤講師」「市の統計調査員」「化粧品の販売」など外勤のアルバイトが中年層（第

三、第四期）でみられるが、これはこの年代の主婦達が外出に可能な、比較的自由な時間を持ち始めているためといえよう。「家庭教師」は第六期、第三期、第四期の順に多く、「ピアノ、書道など趣味的な面での個人教授」はほとんど各期に差がないが、年長者層は茶道教授などであり、若い層ではコーラス指導やテニスクールのコーチなど、年代による内容の相違がみられる。「家庭で学習塾を開いている」は第三期がトップで第四期、第六期とつづく。「添削指導」はほとんどが第四期と第六期で占められている。

その他には、染色教室アシスタント、和裁やあみものの講師、幼児教室の教師、塾の講師、小学校の臨時代替教諭や設計製図の仕事、病院事務、小売店の販売業務、ワードプロセッサー操作業務などに従事する者など、さまざまなアルバイトについていることをうかがわせる。

第11表　主婦などのアルバイト

順位	アルバイトの内容	人　数
1位	家庭教師をしている	38
2位	ピアノ，書道など趣味的な面での個人教授をしている	27
3位	家庭で学習塾を開いている	22
4位	添削指導をしている	16
5位	翻訳をしている	6
6位	校正，編集をしている	2
	その他	63
	合　　計	175

ここで参考までに、就職を希望する会員のための活動を行っている桜楓会人材銀行が報告した、昭和五十八年度の「求人及びその就職状況」を示してみよう。

五十八年度の「桜楓会人材銀行カード」の登録者数は三四六名で、すでに登録ずみの者や会員以外を含めると二千数百名の者が登録している。

第12表　人材銀行における求人，就職状況

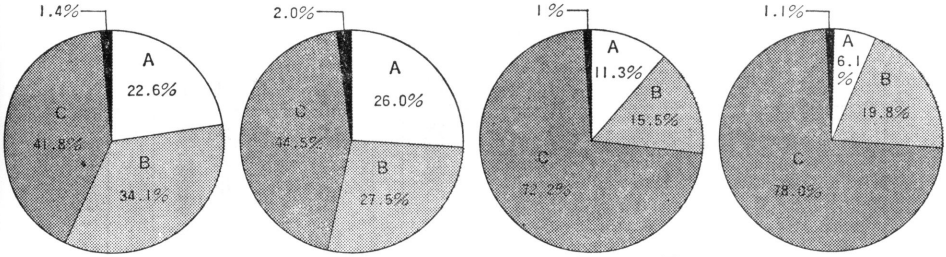
（昭和58年12月現在）

	昭和五七年度	昭和五八年度
Ⅰ 登録者数	三二四人	三四六人
Ⅱ 求人申込数	一六七	二七一
Ⅲ 成立件数	一五六	一六三
内訳 常勤	六七	七四
内訳 非常勤・＋＋アルバイト	八二	七六
内訳 在宅	七	一三
Ⅳ 就職先の職種		
研究所、法律事務所	三八	四一
会社事務	四二	五三
学校事務	一九	一二
秘書	二二	一九
病院　受付事務	一一	六
短大・高校講師	四	二
幼稚園	三	一
図書室、出版関係		七
翻訳	一一	八
家庭教師	三	五
モニター、清書、テープ起し	三	九

一方、人材銀行に寄せられた五十八年度の求人申込み件数は二七一件であり、その多くが「常勤」を希望したものであった。それにひきかえ、就職を希望する会員の側では「常勤」よりもむしろ「非常勤」「短期のアルバイト」、または「在宅でできる仕事」を希望する者が多く、両者の希望がかみ合わない場合が多いのが現状だそうだ。人材銀行でも、求人が多くても、その希望に応えられない状態である旨の報告をしている。

また、桜楓会が行う活動の一つである「桜楓学園」ではこれまで、母校の教科課程にない職業訓練を行ってきており、専門的技術の修得にも力を入れて取組んでいる。英文タイプ、カウンセリング講座、消費生活アドバイザー講習会、パソコン教室など時代に適応したプログラムを用意、成果を上げている。

A参加している　B過去に参加した　C参加した経験がない　←無答



3期・新1～10回　4期・新11～20回　5期・新21～26回　6期・新27～33回

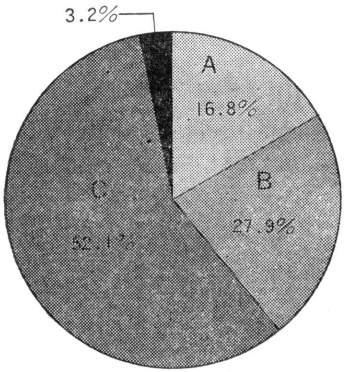
四　社会活動について

次に、家事を中心とする家庭生活や、収入を伴う職業生活とは異なる社会的な活動（福祉活動、ボランティア活動など）について、その参加状況をみてみよう。ここでいう社会活動とは、稽古ごとなどの趣味的活動やカルチャーセンターなどでの学習、図書館司書や栄養士などの資格取得学習は含まず、より多く奉仕的な要素を含む社会活動についてのみ取りあげ、学習活動については、次の「生涯教育学習」でふれる。

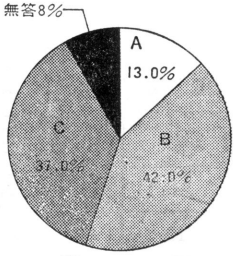
1　活動の参加率

表13に示すように、各種の団体に所属したり、グループを作って社会活動に「参加している」と答えた会員は一六・八%で、全体の二割弱である。この参加率は余り高いものとはいえないが、本調査が一回生から新制三三回生まで、八十年にわたる広い層を対象にしていること、前述したように、学習活動を加えなかったこと、それともう一つ、奉仕活動以外はその参加を団体、グループの役員、世話人に限定したことなどを考えると、必ずしも低率とはいえないであろう。

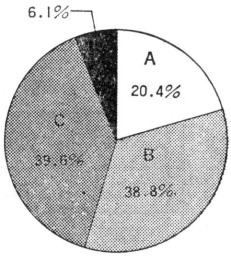
期毎にその参加率をみてみると（図6参照）第一期（平均年齢八十八歳前後）が一三・〇%、第二期（平均年齢六十五歳）が二〇・四%、新制度下の第三期（平均



社会活動への参加



1期・1～28回



2期・29～48回

年齢五十歳）が二二・六%、第四期（平均年齢四十歳）が二六・一%、第五期（平均年齢三十歳）が一一・三%、そして最も若い第六期が六・一%となっており、第一期から徐々に増加して、中年層の第四期をピークに、以後急速に減少する右下がりの山型カーブを描く〈上図6参照〉。

ここで注目されるのは、若い層（第五、第六期）に比べて、もっとも高齢者層の第一期の参加率（一三・〇%）のほうが高くなっていることである。また、中高年層（第二～第四期）の参加率は、共に二〇%台を示すが、この年代の多くが既に子育てを終えて、比較的自由な時間や行動がとれるようになっているためと思われる。一方、これらの層にひきかえ若い層の参加は低率であるが、これは第五期の八割以上が現在結婚して子育てに多忙な時期にあり、また、第六期の六割近くが職を持って働くなど、共に社会活動に参加するゆとりがない世代であるためといえよう。

2　参加経験について

次に、「現在参加していないが過去に参加した経験がある」会員については、第一期が四二・〇%で、六期の中で最も高率であり、過去にこの期の多くの者が活動に参加していたことを示している。第二期は三三・八%、第三期が三四・一%、第四期になると二七・五%に減少し、第五期一五・五%、第六期一九・八%となるが、

それでも第一期を除く全ての期で、現在より過去の参加率のほうが高い結果となった。特に一番若い第六期で、二割近い八七名がなんらかの社会活動の経験者であり、就職以前の学生時代にすでに活動経験を有している者があったことが想像され、興味深い。

「現在参加している」と「現在参加していないが過去に参加した経験がある」の二つを加えて、これまでの参加率をみると、第一期の五五・〇%に続いて、第二、第三、第四期の中高年層ではいずれも五割を越えている。これに対して若い第五、第六期では共に二〇%台にとどまった。しかし前述のように、若い層の多くが、育児に職場にそれぞれ多忙である現状を考えると、この世代の活動はむしろこれからであろうと思われる。

以上のことから、現在においても過去においても、第一期の実績は誠に立派なものといわねばならない。この年代の多くは母校の「共同奉仕」の教育を、世に先がけて実践したパイオニア達であり、そして今、大先輩が遺した社会活動での足跡をたどって、第二、第三、第四期の世代が続いているといえるだろう。第一期の活躍した大正時代から今日までの半世紀、奉仕的な社会活動は高等教育を受けた女性の、しかも三十代から五十代にかけての婦人達に多く支えられてきており、また、これからも支えられていく部分が多いといえよう。

%

4　期	5　期	6　期
353	291	440
26.1	11.3	6.1
27.5	15.5	19.8
44.5	72.2	73.0
2.0	1.0	1.1

3　活動の種類と内容

では、「現在社会活動に参加している」会員は、どんな団体、グループに属しているのだろうか。回答を表14に示すとおり、「社会福祉団体」

第13表　社会活動参加の状況

回生 ＼ 参加の有無	総数	2086	1 期	2 期	3 期
	実数	%	162	553	287
現在参加している	351	16.8	13.0	20.4	22.6
過去に参加したことがある	582	27.9	42.0	33.8	34.1
参加したことがない	1087	52.1	37.0	39.6	41.8
無答	66	3.2	8.0	6.1	1.4

「有志団体」「地域団体」「消費者団体」「職域団体」「同窓会」の八種にまとめてみた。

参加者の多い順にみると、「地域団体」「社会福祉団体」「有志団体」「消費者団体」とつづく。

「地域団体」　公立学校のP・T・A役員をはじめ、地域の社会活動を行っている団体の役員を含んでいるが、中ではP・T・A役員がもっとも多く、第四期（三〇名）、第三期（九名）第五期（六名）の順になっている。

次に参加者が多いのは、「地域婦人会」など地域の婦人団体で、第二期の会員の参加が多く（一二名）、第三期、第四期は同数（五名）でつづいている。

その他、「老人クラブ」「老婦人会」「町内会」には年長の第一、第二期の会員が「補導部長」などの役員として、かなり参加している。

一方「母親大会」「子供会」「子供文庫」「なかよし文庫」などは、第四、第五期の参加が目立つ。第五期は家事育児で余裕がなく、活動に参加している会員も比較的少ないが、この種の地元での活動には参加者が最も多くなっている。

第14表　社会活動の種類と内容

社会活動の種類	内容
社会福祉団体	(例)○手話、点訳などのボランティア団体 ○日本赤十字社奉仕団、更生保護婦人会などの社会福祉団体
有志団体	(例)○大学婦人協会、日本有権者同盟、WILPF、YWCA、私学のPTA役員、ガールスカウト、子供を守る会など
地域団体	(例)○公立校のPTA役員、地域の子供会、子供文庫、老人クラブ、老婦人会、母親大会など地域の団体 ○市町村の地域婦人会など婦人による地域の活動団体
消費者団体	(例)○消費生活センター、生活協同組合など消費者のための活動団体
宗教団体	(例)○日本キリスト教会、仏教婦人会創価学会、日本自由宗教連盟、実践倫理宏正会など
職域団体	(例)○日本婦人法律家協会、科学放送振興協会など業界団体
同窓会	(例)○桜楓会など自分の卒業した学校の同窓会

第15表　社会活動の種類

社会活動の種類＼回生	一期	二期	三期	四期	五期	六期	計
社会福祉団体	5	41	20	15	5	7	93
有志団体	6	12	22	7	3	2	52
地域団体	6	28	18	53	17	4	126
消費者団体	—	2	1	10	6	2	21
宗教団体	5	7	2	—	1	—	15
職域団体	1	5	2	1	—	—	9
同窓会	1	2	1	—	—	—	4
その他	2	8	3	3	2	1	19
計	26	105	69	89	34	16	339

「社会福祉団体」　各種の奉仕活動（ボランティア活動）を行っている団体を含んでいる。

主なものは、「日本赤十字社奉仕団」（六名）、「厚生保護婦人会」（五名）、「地区社会福祉協議会」などがあり、その他具体的に記述されているものは、「いのちの電話」「耳で聞く図書館」（藤沢市）、「桜楓会〝麦笛〟」（朗読テープ作り）、「ことばの不自由な子を守る会」「手でみる絵本づくり」「手話通訳」「手話サークル」「ボランティア労働銀行」「給食ボランティア」「日本点字図書館」「秋津療育園ボランティアグループ」「日本リウマチ友の会」「東京都精神障害者を守る連合会（つくし会）」など数名ずつ参加しているものは、六十の団体に及ぶ。

参加者は、第二、第三、第四期の順に多く、この面での中高年層の活躍が目立つ。また、若い六期で参加している会員の半数近くが、この種のボランティアグループに属していることにも注目したい。

「有志団体」　「大学婦人協会」「婦人国際自由平和連盟（ＷＩＬＰＦ）」「日本基督教女子青年会（ＹＷＣＡ）」「日本婦人有権者同盟」「新日本婦人の会」「日本自然保護協会」などの団体が含まれている。参加者は中高年層の第二、第三期がその他の期に比べて多い。

「消費者団体」　消費者のための活動を行う団体であって、「生活共同組合」「食生活改善教室」「食品公害を追放して安全な食品を求める会」「自然農法による作物の生産者と消費者の会」などへの参加が多く、中年層の第四期、若い層の第五期が参加している。

その他、「宗教団体」には「キリスト教」関係の団体、「創価学会」「実践倫理宏正会」などに年長者の参加が多い。「同窓会」では「桜楓会」その他数団体にもわずかながら参加している。

3　参加意欲の有無

次に、現在社会活動に参加していないが今後参加する意欲を持っている会員はどの位あるか、についてみてみよう。

「機会があれば参加したい」と答えた会員は一、六六九名中七七九名で四六・七%、全体の五割に近く、「現在活動に参加していない」会員でも、その中の二人に一人は「機会があれば参加する」意欲を持っていることがわかる。「参加したいと思わない」と答えている会員は四三・六%であるが、これらの回答の中には、高齢であることや健康面、あるいは生活環境面などで参加が困難であることをわざわざ記したものがあり、心情的には「参加したい」と受取れるものが多かったので潜在的な参加意欲を持っている会員は、もう少し増えると思われる。

これを期別にみると、第一期が一一・七%、第二期は四〇・四%、第三期四七・七%、第四期の五五・九%と漸次増加して、第五、第六期でほぼ同率の五三・三%、五三・四%となっている。(16表参照)

ここで注目したいのは、参加率が低かった第五、第六期にあっても参加意欲はかなり高く、第四期との差がわずか三%にすぎないことである。

第一期で「参加したいと思わない」と答えた会員が七割近くあるが、七十五歳以上のこの期の年齢層を考えれば、当然のことといえよう。むしろ、諸々のハンディにもかかわらず、一二%が「参加したい」と答えていることに注目したい。中高年層の第二期でも参加意欲は四割に達している。

%

4　期	5　期	6　期
254	255	408
55.9	53.3	53.4
36.6	43.9	40.7
7.5	2.7	5.9

第三期からは参加意欲のある会員（四七・七％）が、意欲のない会員（三九・四％）を上まわり、この傾向は特に第四期において顕著である。この層は、現在社会活動に参加している会員がもっとも多く、これに意欲のある会員を加えると、六割以上の会員が活動に参加しているか、あるいは活動に対する意欲を持っていることになる。

自身の生活以外の広い社会にも眼を向けようとする意欲を持っていることはこの層の者が時間的、経済的ゆとりも同時に持ち合わせているものと思われる。

また、活動の参加率がもっとも低かった若い層（第五、第六期）でも、五割以上が参加への意欲を示していることは、この年代の者たちが比較的自由な時間が持てるようになると思われる十年後には、現在より活動に参加する会員が増加するのではないか、といった期待を抱かせるものといえよう。

4　希望する活動の種類

「現在参加していないが、機会があれば参加したい」と答えた七七九名に、「あなたが考える社会活動とは、どんな活動を指すのか」を自由記述でたずねた。回答は多種多様であったが大別すると、「ボランティア活動」「老人への奉仕活動」「青少年の育成活動」「女性の地位向上に関する活動」「地域活動」「国際交流に関する活動」などである。

第16表　社会活動不参加者の参加への意志

回生 ＼ 参加の意志	該当者数 1669		1 期	2 期	3 期
	実数	%	128	406	218
機会あれば参加したい	779	46.7	11.7	40.4	47.7
参加したいとは思わない	732	43.9	67.2	46.6	39.4
無答	158	9.5	21.1	13.1	12.8

表17に示すように、もっとも多いのが「ボランティア活動」であり、「地域活動」などがつづいている。

ボランティア活動　圧倒的に多い「ボランティア活動」の中には、単に「福祉活動」「ボランティア」「社会の一員として役立つ活動」など漠然とした記述のものから、「点訳」「手話」「朗読」「身障児の学習指導」などの具体的なものまで、さまざまな活動を含んでおり、この種の活動を挙げた会員は各期にわたり「奉仕活動」の八割を占めている。

最高年齢層の第一期は〝奉仕する側〟から〝される側〟にまわって、少しもおかしくない世代であるが、「健康と体力の許す範囲で」「年相応のことで」など条件を付けながら、「音読奉仕」などのボランティア活動を希望しており、奉仕の精神をいつまでも失わないファイトに敬服する。

第二期では、「託児所での子供の世話」「病院奉仕」「持っている技術（温熱療法）を役立てたい」「弁当配達の奉仕」などの活動をあげている者も多く、定年後もまだまだ体力的に余力のある世代であることをうかがわせている。

中年層の第三、第四期では「小児病院の看護」や「盲人奉仕」の外に、「コンサルタントの仕事」「カウンセリング」「能力を活かした学習指導」など、持っている専門的技術的な知識を活かした活動を希望するものが目立っている。

四　期 （新11回～20回）	五　期 （新21回～26回）	六　期 （新27回～33回）
ボランティア活動	ボランティア活動	ボランティア活動
地　域　活　動	地　域　活　動	地　域　活　動
老人への奉仕活動	青少年の育成活動	老人への奉仕活動

若い層（第五、第六期）では、「時間の許す範囲で」「在宅でできることで」「働く主婦でもできることがあれば」などの条件をつけている者が多く、家事、育児、また就業で時間的余裕の少ないこの層であっても、できる範囲で社会の役に立ちたいという意欲だけは持つ者がいることを示している。したがって、他の期に比べて具体的な活動の記述に乏しく、わずかに第六期で、「身体不自由児の世話」「老人ホームへの慰問」などが目立ったにすぎない。

「地域活動」　中高年層（第一～第三期）に「町内活動」「町の相談役」「公民館運動」をあげる会員が多く、中年から若い層（第四～第六期）では、「PTA活動」「生協活動」「消費者運動」などを希望している（表18参照）。どちらも実生活に結び付いた市民活動に関心があるといえよう。特に、第五期からは「子供の不用衣料や生活用品のリサイクル運動」「安全な食品で子供の命を守る運動」のように、育児をとおして地元で活動することを望むものがあげられ時間的制約の多い主婦にとって、地域活動は比較的参加しやすいものの一つであろうと思われる。

「老人への奉仕」　「一人住いの老人を慰問」をあげた第一期の会員のような同輩へのいたわりもあれば、また中高年層（第二、第三期）からの「高齢化社会に対応した老人のためになること」「老人ホームでの介護」、「おむつたたみ」

第17表　希望する社会活動（上位3位）

順位＼期	一期（1回～28回）	二期（29回～48回）	三期（新1回～10回）
1位	ボランティア活動	ボランティア活動	ボランティア活動
2位	老人への奉仕活動	老人への奉仕活動	老人への奉仕活動
3位	地域活動	地域活動	青少年の育成活動

「一人住いの老人の身のまわりの世話」などの労働力の提供、そして中年層から若い層（第四～第六期）からの「老人の話相手」「老人を慰めるため」など、各期ごとに、高齢者へのボランティア活動の表現が異っている。

これは多分、奉仕する側の年齢や環境の違いからくるのであろう。中高年齢層が見せたこの活動への意欲の強さは、高齢者の親を抱えるこの年代が、老人問題について切実な体験、関心をもっていることを示しているといえよう。

「青少年育成活動」　「スポーツを通じて青少年の健全化を」「子供を非行から守る運動」「子供図書館で読書指導」「子供に本の貸し出しをする運動」などにみられるような青少年に関わる活動が、主に、第二、第三期からあげられていたのが目立っている。

第18表　希望する社会活動の種類と内容

希望する社会活動の種類	内容
ボランティア活動	(例)○朗読、手話、点訳など手近かなボランティア活動 ○身体不自由者(児)、障害者(児)へのボランティア活動 ○その他広義の福祉活動
老人への奉仕活動	(例)○老人への家庭訪問、老人ホーム慰問 ○老人の相談相手 老人介護
青少年の育成活動	(例)○青少年の非行に関する活動 ○児童館活動
女性の地位向上に関する活動	(例)○職場における男女平等 ○働く女性を守る運動
地域活動	(例)○町内会活動 ○PTA活動 ○生協活動 ○消費者運動
国際交流に関する活動	(例)○難民救済活動 ○留学生の世話 国際親善活動

その他では、全般的に「里親制度」「反戦核運動」「旧地名保存運動」「アイバンク、腎臓バンクなどの申込み協力を『新報』などで募ってほしい」など、かなり具体的な意見が寄せられた。

以上のように、希望する社会活動の種類においても、「ボランティア活動」を会員の多くが「しなければならないこと」として認識していることが明らかになった。

桜楓会が設立された明治三十七年より、桜楓会員は積極的にボランティア活動に参加しつづけてきた。託児所、夜間女学校、風水害時の臨時託児所の設置、関東大震災時の救援活動、戦後にあっても、緑陰学校など、会としての活動はもとより、個人での参加も多かったことは伝統的なものであり、今回の調査でも、それは明らかとなった。

しかし、「ボランティア活動」も、かつてのそれとは社会相の変化、複雑化により、少しずつ問題点も異ってきており、また「手話」「朗読」など、技術の取得を必要とするものもある。

桜楓会では、すでに数年前からこの方面での研修に取組み、「朗読テープ作り・麦笛の会」「手話を学ぶ会」を誕生させており、その成果も徐々にあがっているが、こうした会の一層の発展やボランティア講座の開講な

第19表　希望する社会活動の種類（上位6位）

順位	活動の種類＼期	一期～六期
1	ボランティア活動	307
2	地域活動	73
3	老人への奉仕活動	45
4	青少年の育成活動	32
5	国際交流に関する活動	31
6	女性の地位向上に関する活動	12
合計		500

ど、ボランティア活動をより充実、強化するために、こうした高い意欲をみせた会員のエネルギーを、ぜひ一つにまとめる方向にもっていきたいものである。

5　公職への参加率

では、これらの社会活動の中で、各種審議会委員、教育委員、公民館運営委員、民生委員、保護司など「公職」に就いている会員は、どのくらいいるだろうか。

現在公職に就いている会員は全体の四・七％で、「就いた経験のない」会員が八割となっている。

まず、各期ごとにみると、第一期が四・三％、第二期がもっとも多く一一・二％、第三期が六・三％、第四期が二・三％である。第五期にはおらず、第六期で一名が公職に就いていることになる。（20表参照）

しかし、公職に就く場合には、その分野に貢献できる専門的な知識、経験が求められ、ある程度年齢的なものが加味すると思われるので、若い層が低率であることは、当然のこととといえよう。むしろ第一期の四・三％という数値は、この期の者たちが七十五歳以上の高齢であることを考えるなら、特筆すべきこととといえよう。

次に、「現在は就いていないが、過去に就いた経験がある」と答えた会員は、第一期がもっとも多く二四・一％、以後順に第二期が七・六％、第三期が六・六％、第四期二・五％、第五期〇・七％、第六期〇・二％となっている。

％

4　期	5　期	6　期
353	291	440
2.3	0.0	0.5
2.5	0.7	0.2
85.6	93.1	93.9
9.6	6.2	5.5

第20表　公職への参加率

公職経験＼回生	総数	2086	1 期	2 期	3 期
	実数	%	162	553	287
現在公職に就いている	97	4.7	4.3	11.2	6.3
就いていたことがある	112	5.4	24.1	7.6	6.6
就いたことがない	1685	80.8	55.6	68.9	79.4
無答	192	9.2	16.0	12.3	7.7

第一期の参加率がもっとも高いのは、この期の会員たちが過去に社会の中枢でいかに活躍したかを、如実に示しているといえよう。

現在の参加率と、過去の参加経験を加えると、やはり第一期が二八・四％でもっとも高く、ついで第二期の一八・八％、第三期の一二・九％と順次低下している。

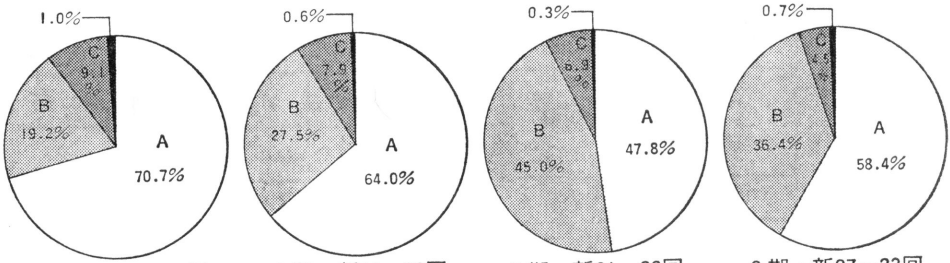
公職の種類についてみると、家庭裁判所調停委員がもっとも多くて約三割を占め、ついで各種審議会委員、民生委員、とつづいている。

第一期では「家裁調停委員参与」「県地婦連副会長」など、八十歳近くなってもなお活躍中の者がいる。

その他、第二期では「市議会議員」「日本学術会議分科会委員」「東京都青少年問題協議会委員」「兵庫県明るい選挙推進協議会委員」「婦人問題懇談会委員」「同和教育協議会常任委員」「川崎刑務所篤志面接委員」などがあげられている。

第三期では、「埼玉県婦人問題協議会委員」「地方裁判所民事調停委員」「県委嘱統計調査委員」「県家庭科教育研究協議会委員」第四期は「神奈川県統計審議会委員」などである。

A学習している　B学習したいと希望　C特に考えていない　無答



3期・新1～10回　4期・新11～20回　5期・新21～26回　6期・新27～33回

五　生涯教育について

〝生涯教育〟は、成瀬先生の理想であり、桜楓会はその理想実現の場であった。「生涯学生たれ」とは、卒業式のたびに成瀬先生が卒業生に贈られた言葉である。「卒業後、自分を進め、家庭を改良し、社会を改善」するため、一生涯成長してゆくように、桜楓会員の前途を期待し、また案じられて、桜楓会にその活動の実践を求められた。

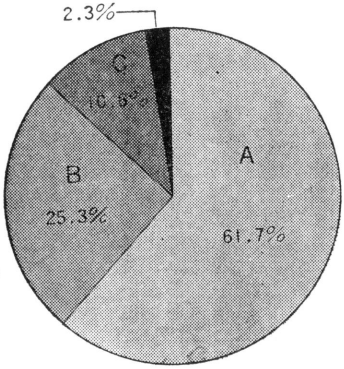
その遺志をついで、終戦後、井上秀、大橋広理事長は生涯教育の実践を叫び、母校にあっては通信教育部の開設、桜楓会にあっては桜楓学園の開講、生涯教育講座が開始された。

昭和三十六年、〝生涯教育〟という言葉すらまだ定着しない時期に、桜楓会は生涯教育講座の理念をかかげ、実践してきたのである。

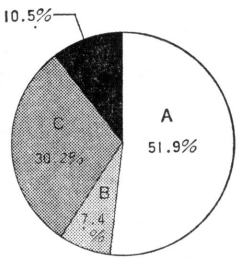
そうした創立者の教育理念の中で育ち、学業を終

%

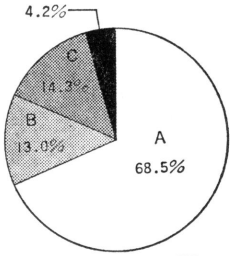
4期（新11回～20回）	5期（新21回～26回）	6期（新27回～33回）
353	291	440
64.0	47.8	58.4
27.5	45.0	36.4
7.9	6.9	4.5
0.6	0.3	0.7



生涯教育への参加



1期・1～28回



2期・29～48回

えた桜楓会員は、〝生涯教育〟を、どのように受けとめ、どうとり組んでいるのだろうか。

1　生涯教育講座への参加率

「現在学習をしている」会員は、一、二八八名、六一・七%、六割を越える。また、「現在はしていないが、今後学習したいと希望している」会員は五二七名、二五・三%、「特に学習を希望していない」会員は二二二名、一〇・六%となっている。

昭和五十八年十月、東京都のある区で行った区民意識志向調査によると、「現在学習している者」は三六・五%にすぎず、これに比べると、本調査の対象者（明治三十七年卒業の一回生～昭和五十八年卒業の新制三三回生）の六割が、学習中であるということは、注目に価する。〈上図7〉

また、現在は学習していない者七四九名中、五二七名、七割の者がなんらかの学習を希望しており、現在学習はしていないものの、その学習希望率もか

第21表　学　習　状　況

学習経験＼回生	総数 2,086		1期（1回～28回）	2期（29回～48回）	3期（新1回～10回）
	実数	%	162	553	287
現在学習中	1,288	61.7	51.9	68.5	70.7
今後学習希望	527	25.3	7.4	13.0	19.2
学習希望なし	222	10.6	30.2	14.3	9.1
無答	49	2.3	10.5	4.2	1.0

なり高くなっている。

各期ごとにみると、「現在学習している」者は、最高齢の第一期で五一・九%、若い層の第五期が四七・八%、いちばん若い層の第六期が五八・四%と、全体の中ではやや低い参加率を示すが、これは第一期が平均年齢八十歳前後、かなり高齢であること、第五、第六期では、子供の養育に追われる者が多かったり、就職者が多いことを考えれば、むしろ高い参加率といえるかもしれない。

それに比べると、中年層の第二期が六八・五%、第三期が七〇・七%といちばん高く、第四期は六四・〇%となっている。

「今後学習をしたいと思う」学習希望率は、第一期が七・四%、学習率の高かった中年層では、第二期一三・〇%、第三期一九・二%、第四期二七・五%と当然ながら低く、一方、現在は学習の時間的余裕のない第五期で四五%と高い希望を示し、第六期も三六・四%とそれにつ　%いで高い希望を示している。〝生涯教育〟が、婦人の活動の中で、高い定着率を示す最近だが、そうした風潮の中にあっても、この数値は桜楓会員の高い意欲を示すものといえよう。

ことに最高齢者層の第一期で、半数以上の会員が学習をつづけているということは、まさしく成瀬先生の「生涯学生たれ」の教えが現在も脈々と生きつづけている例証

4期（新11回～20回）	5期（新21回～26回）	6期（新27回～33回）
226	139	257
19.5	10.8	16.7
23.9	38.1	40.5
7.5	2.9	4.7
8.4	7.2	4.3
14.2	11.5	7.8
22.6	19.4	19.5
25.7	18.0	20.2
6.6	7.9	17.5
47.3	41.7	40.9
16.4	21.6	18.7
1.8	2.2	0.8

といえるだろう。

2　学習の内容

現在行っている学習内容を全体的にみると、「趣味に関すること」がトップで四八・一%、二位が「語学」で二六・二%、三位「文学・歴史」で二四・一%、以下、「スポーツ・健康」一七・九%、「家庭生活に関すること」一七・五%とつづく。

各期ごとにみると第二期から第六期（中高年齢層から二十代の新入会員まで）まで、幅広い層で「趣味に関すること」がトップを占めるのに対し、高齢者層の第一期で「文学・歴史」が五四・八%でトップを占め、注目される。

「語学」については第二期以降第六期まで、国際化時代を反映して、かなりの学習率を示している。

「スポーツ・健康に関すること」が、平均年齢四十歳の第四期以降で順次二、五、三位となり、〝自分の健康は自分で管理〟しようという健康への積極的な意欲と、ス

第22表　学習の内容

学習内容＼回生	該当者数　1,288		1期（1回～28回）	2期（29回～48回）	3期（新1回～10回）
	実数	%	84	379	203
文学・歴史	310	24.1	54.8	30.1	23.6
語学	338	26.2	8.3	18.7	24.1
国際理解に関する問題	102	7.9	16.7	9.0	10.3
婦人問題	105	8.2	15.5	10.8	5.4
消費生活に関すること	162	12.6	16.7	14.5	12.3
家庭生活に関すること	225	17.5	17.9	12.9	16.3
スポーツ・健康	230	17.9	14.3	12.1	18.2
職業技術に関すること	89	6.9	2.4	1.3	5.4
趣味に関すること	620	48.1	45.2	56.5	48.3
その他	218	16.9	13.1	14.2	18.7
無答	21	1.6	2.4	1.8	1.5

（注）多答式のため100%をこえる

ポーツブームの反映をみせている。

また、「家庭生活に関すること」が各期でかなりの学習率をみせており、よき家庭人でもある桜楓会員の日常生活ぶりをうかがわせてくれる。

そうした中で、いちばん若い第六期で、「職業技術に関すること」が「家庭生活に関すること」とほぼ同じ率で学習され、注目される。

3　希望する学習内容

また、現在「学習をしていない」会員のうち、学習を希望する者があげたその内容は、全体的にみると「文学・歴史」が高く、中でも戦前派の第一期、第二期ではともに四一・七%という高い希望を示し、中年層の第三期でも二九・一%、三割が希望している。

平均年齢約四十歳の第四期、若い層の第五、第六期では「語学」が各々二一・六%、二五・二%、二七・五%でトップを占め、国際派への志向の強さをみせている。

そうした中で、最高齢の第一期で「国際理解に関する問題」がかなりの希望をみせ、明治生まれの婦人のもつ幅広さ、新しさをのぞかせている。

%

4期（新11回～20回）	5期（新21回～26回）	6期（新27回～33回）
226	139	257
2.7	1.4	1.2
27.4	42.4	49.0
40.7	25.9	19.1
22.1	23.0	24.5
24.8	17.3	28.8
20.8	11.5	10.1
6.2	16.5	14.4
5.3	10.1	7.4
0.9	1.4	5.4
2.7	2.2	3.5
8.8	5.8	7.0
0.9	0.7	0.4

4　学習の形態

では、現在学習中の者はこれらの学習を、どんな形態で学習しているのだろうか。表23にみるとおり、「ラジオ・テレビ・本による独学」がトップで三七・二%、「グループ・サークルによる学習」が三三・九%、「民間団体・企業の行う学級、講座」が二三・九%、「個人教授」二一・一%、「行政の行う学級・講座」一五・五%、「通信教育」一〇%とつづく。

明治三十七年卒業の一回生から昭和五十八年卒業の新制三十三回生までの年齢層の幅広い調査だけに、外出が不可能な高齢者、子育て中の者、就業中で時間的余裕がない世代を含むためか、「独学」がトップにあげられている。しかし言いかえれば、そうした日々の中でも、そうした生活の中だからこそ学習意

第23表　学習形態

学習機関＼回生	該当者数　1,288		1期（1回～28回）	2期（29回～48回）	3期（新1回～10回）
	実数	%	84	379	203
桜楓会による各種研究	43	3.3	7.1	4.0	5.4
ラジオ・テレビ・本による独学	479	37.2	48.8	33.8	31.0
グループ・サークル	436	33.9	28.6	38.3	44.3
個人教授	272	21.1	13.1	21.6	16.7
民間団体・企業の行う学級・講座	308	23.9	10.7	24.5	25.6
行政（市町村）の行う学級講座	200	15.5	17.9	17.4	14.8
通信教育	129	10.0	10.7	7.7	8.4
専門学校や各種学校	64	5.0	—	2.1	5.4
大学院への入学 大学への再入学	22	1.7	—	0.5	1.0
大学・大学院での聴講	33	2.6	2.4	1.3	3.9
その他	100	7.8	10.7	7.4	8.4
無答	20	1.6	3.6	2.4	2.0

（注）多答式のため100%をこえる

欲を燃えたたせ、学習に取り組む意気ごみに、成瀬先生の教えが息づいているように思われる。

「行政の行う学級・講座」への参加が五位というのは、全国各地の会員へのアンケートだけに、地域差の大きい故だろうか。

期ごとにみると、前述したように「外出しにくい状態」と考えられる高齢者層の第一期、子育て中の者、そして就職者の多い若い層の第五、第六期で「ラジオ・テレビ・本による独学」が、五割近い高率でトップにあげられている。

逆に「子育ても終わり、外出が比較的自由な状態」と思われるやや高中年層の第二期、中年層の第三、第四期では、「グループ・サークルによる学習」がトップに並ぶ。

また、全体で約一割の者が「専門学校や各種学校」「大学、大学院への再入学、入学」「大学、大学院での聴講」

%

4期（新11回～20回）	5期（新21回～26回）	6期（新27回～33回）
97	131	160
10.3	17.6	11.9
21.6	25.2	27.5
1.0	0.8	—
—	3.1	1.9
7.2	3.8	3.1
2.1	6.9	8.1
2.1	6.1	3.7
6.2	6.1	8.7
13.4	4.6	5.6
1.0	5.3	2.5
3.1	0.8	—
6.2	3.1	1.9
—	—	3.1
—	—	0.6
7.2	6.9	8.7
18.6	9.9	12.5

%

4期（新11回～20回）	5期（新21回～26回）	6期（新27回～33回）
97	131	160
4.1	4.6	4.4
8.2	11.5	13.7
19.6	15.3	16.2
3.1	3.8	2.5
6.2	6.1	12.5
8.2	3.8	1.9
8.2	10.7	16.2
2.1	6.1	6.9
—	9.2	1.9
10.3	8.4	5.0
8.2	7.6	5.6
21.6	13.0	13.1

第24表　希望する学習内容

学習内容＼回生	該当者数 527		1期（1回～28回）	2期（29回～48回）	3期（新1回～10回）
	実数	%	12	72	55
文学・歴史	103	19.5	41.7	41.7	29.1
語学	112	21.3	0.0	9.7	12.7
国際理解に関する問題	6	1.1	8.3	1.4	3.6
婦人問題	10	1.9	—	4.2	—
消費生活に関すること	21	4.0	—	5.6	—
家庭生活に関すること	33	6.3	8.3	4.2	9.1
スポーツ・健康	18	3.4	—	1.4	1.8
職業技術に関すること	30	5.7	—	—	3.6
趣味に関すること	40	7.6	8.3	11.1	5.5
資格取得のための学習	14	2.7	—	2.8	—
老人問題	5	0.9	—	—	1.8
子供の教育に関すること	16	3.0	—	—	5.5
カウンセラー	5	0.9	—	—	—
陶芸	1	0.2	—	—	—
その他	37	7.0	8.3	4.2	5.5
無答	76	14.4	25.0	13.9	21.8

第25表　希望する学習形態

学習形態＼回生	該当者数 527		1期（1回～28回）	2期（29回～48回）	3期（新1回～10回）
	実数	%	12	72	55
桜楓会による各種研究活動	30	5.7	8.3	13.9	3.6
ラジオ・テレビ・本による独学	72	13.7	25.0	18.1	20.0
グループ・サークル	87	16.5	—	18.1	16.4
個人教授	17	3.2	16.7	4.2	—
民間団体・企業の行う学級・講座	43	8.2	8.3	5.6	7.3
行政の行う学級・講座	23	4.4	—	6.9	3.6
通信教育	51	9.7	—	4.2	—
専門学校や各種学校	23	4.4	—	—	3.6
大学院への入学 大学への再入学	17	3.2	—	2.8	—
大学，大学院の聴講	38	7.2	—	4.2	10.9
その他	36	6.8	8.3	4.2	9.1
無答	90	17.1	33.3	18.1	25.5

を行っている。

5　希望する学習形態

「現在学習はしていないが学習を希望している」会員が希望する学習形態は、表26のとおりである。トップが「グループ・サークル」の一六・五%、二位が「ラジオ・テレビ・本による独学」の一三・七%、三位が「通信教育」の九・七%、四位「民間団体・企業の行う学級・講座」の八・二%、五位「大学、大学院の聴講」七・二%とつづく。ここでも、専門学校、大学、大学院での修学、聴講などの希望者が七八名、一割以上いる。

「現在学習中」の会員の中では必ずしも多くはなかった「桜楓会による各種研究活動」が戦前グループの第一、第二期では共に三位にあげられている。

各期をとおして「ラジオ・テレビ・本による独学」「グループ・サークル」による学習希望が多い。

%

5　期（新21回～26回）	6　期（新27回～33回）
職業に生かす	職業に生かす
自己開発のため	自己開発のため
心豊かに生活するため	心豊かに生活するため

6　生涯学習で得たものをどう活用したいか

生涯教育に関して、さすがに高い生涯学習率を示した桜楓会員は、学習によって得たものを、どう生活の場で活用したいと考えているのだろうか。

表26をみてみよう。

「意識して活用しようという気持ちはないが、〝自分はまだ学んでいる〟ということに喜びを感じている」（27回）

という七十二歳（?）の会員の声に代表されるように、意識した目

第26表　生涯教育の目的（上位３位）

順位＼回生	1　期（１回～28回）	2　期（29回～48回）	3　期（新１回～10回）	4　期（新11回～20回）
１位	自己開発のため	心豊かに生活するため	職業に生かす	職業に生かす
２位	心豊かに生活するため	自己開発のため	自己開発のため 心豊かに生活するため	自己開発のため
３位	社会活動に生かす 人に教える 趣味として	人に教える	人に教える	心豊かに生活するため

的意識より、からだに刻みこまれた〝生涯学習〟の理念の強さが、戦前派の第一、第二期には感じられる。「社会活動に生かす」「人に教える」など、見事というほかない。

戦後派になると、第三期以降第六期まで、「職業に生かす」がトップで、目的意識の明確さをうかがわせる。

「子育てが一段落したのちに、それを生かせる職業につきたいと思い学習中」（新25回）

「大学で資格をとり直し、生涯のライフ・ワークとしたい」（新30回）

など、人生設計をしっかりたてた堅実な学習派、そして注目したいのは、

「主人が停年後、シルヴァ・ボランティアとして後進国で指導したいので」（新12回）

「外国人留学生の世話をしたい。また発展途上国の恵まれない子供たちへ援助、協力活動をしたいので、語学の勉強をしている」（新20回）と、生涯教育学習をボランティア活動と結びつけて実行している者などもあり、取り組み方はさまざまであるが、真剣な取り組みがそこには感じられる。

六　いちばん関心を寄せること

生涯教育に高い意欲をみせた桜楓会員の日常関心事は、どこにあるのだろうか。

表27をみてみよう。興味深いことに、戦前派、戦後派、そしていちばん若い層と、三つのグループに傾向がわけられる。

1　戦前派、戦後派の違い

戦前派の第一期、第二期ではトップがともに「健康の問題」であり、「宗教、その他精神生活に関すること」にかなり高い関心を示している。後述する「学生生活の思い出」に、〃成瀬先生の実践倫理の講義〃を忘れがたい思い出として胸に秘める会員の多い世代だけに、宗教的問題は身近な問題であるのかもしれない。

戦後派の第三、第四、第五期はともに一位が「家庭、家族のこと」、二位「芸術・芸能・趣味的活動」、三位「専門的な学問分野の研究や学習」とつづいている。

いちばん若い第六期では、一位が「芸術・芸能・趣味

5　期（新21回～26回）	6　期（新27回～33回）
家庭，家族のこと	芸術・芸能・趣味的活動
芸術・芸能・趣味的活動	家庭，家族のこと
専門的な学問分野の研究や学習	専門的な学問分野の研究や学習
職業生活	旅行，スポーツなど
健康の問題	職業生活

的活動」、二位「家庭、家族のこと」、三位「専門的な学問分野の研究や学習」となっている。

新制度下とはいえ旧制の雰囲気の残る中に学んだ第三期で「宗教、その他精神生活に関すること」がかなり高い関心を集め、年代的にも戦前グループへの移向をうかがわせて興味深い。

2　職業に就いている者、就いていない者の関心事の相違

では、生活の中での関心事に、「現在職業に就いている者」と「現在職業に就いていない者」とでは、どのような違いがあるのだろうか。

表28は、「現在職業に就いている者」と「現在職業に就いていない者」の関心事ベスト3を、各期ごとにあげたものである。

こうしてみると、両者にはかなり顕著な相違がみられ「職業に就いている者」のグループには「専門的な学問分野の研究や学習」「職業生活」などに寄せる関心が

第27表　関心事ベスト5

回生／順位	1　期（1回～10回）	2　期（11回～48回）	3　期（新1回～10回）	4　期（新11回～20回）
1位	健康の問題	健康の問題	家庭，家族のこと	家庭，家族のこと
2位	宗教，その他精神生活に関すること	芸術・芸能・趣味的活動	芸術・芸能・趣味的活動	芸術・芸能・趣味的活動
3位	芸術・芸能・趣味的活動	家庭，家族のこと	専門的な学問分野の研究や学習	専門的な学問分野の研究や学習
4位	家庭，家族のこと	宗教，その他精神生活に関すること	旅行，スポーツなど	健康の問題
5位	旅行・スポーツ	専門的な学問分野の研究や学習	宗教，その他精神生活に関すること	職業生活

強く、職業生活への取り組みが真剣であることを感じさせる。

有職者七八二名のうち、現在「生涯教育学習」に取り組んでいる者は、約七割、五四七名いるが、そのこととあわせて考えると、職業生活を意欲的に送る会員の姿がうかがえる。

そして「現在職業に就いていない者」、多分家庭にある者が多いであろうが、そのグループでは「家庭、家族のこと」に強い関心を寄せている。

また、そのことが、「家庭、家族」のみの関心事に片寄ることなく、「自己実現」の方向に向う萠芽を見せるものと確信できるのは、「社会活動への参加」の意欲、「生涯教育への取り組み」への意欲の強さをみてきたためであろう。

3　会員の関心事と桜楓会のかかわり方

「卒業後二十年近く、桜楓会とは全く無関心に過ごしてきた。子供が手を離れ、社会に目を向けようとした今、桜楓会は足場になってくれるような気がする」（新12回）

と期待されるように、家庭にあってよき家庭人としてつとめつつ、エネルギーを内在する会員に、社会への窓を開く足場として、契機

	順位	現在，職業に就いている	職業に就いていない
4期	1位	専門的な学問分野の研究や学習	家庭，家族のこと
	2位	家庭，家族のこと	芸術，芸能，趣味的活動
	3位	芸術，芸能，趣味活動 職業生活	健康の問題
5期	1位	職業生活	家庭，家族のこと
	2位	専門的な学問分野の研究や学習	芸術，芸能，趣味的活動
	3位	家庭，家族のこと	健康の問題
6期	1位	芸術，芸能，趣味的活動	家庭，家族のこと
	2位	専門的な学問分野の研究や学習	芸術，芸能，趣味的活動
	3位	職業生活	専門的な学問分野の研究や学習旅行，スポーツなど

として桜楓会が働きかけることができるならば、そのエネルギーを一つにまとめることができたら、桜楓樹はどんなに豊かに生い茂ることであろうか。

それはまた、「健全な社会を作る為めに、健全な家庭をつくり、健全な家庭をつくる為めに賢明な女子を教育する母校の精神を具体化する所」と、桜楓会に望まれた成瀬先生の理想に、即かなうことではないだろうか。

第28表　有職者，職業に就いていない者の関心事（上位３位）

	順位	現在，職業についている	職業に就いていない
１期	１位	芸術，芸能，趣味的活動	健康の問題
	２位	宗教，その他精神生活に関すること	宗教，その他精神生活に関すること
	３位	健康の問題	芸術，芸能，趣味的活動
２期	１位	専門的な学問分野の研究や学習	健康の問題
	２位	芸術，芸能，趣味的活動	芸術，芸能，趣味的活動
	３位	健康の問題	家庭，家族のこと
３期	１位	専門的な学問分野の研究や学習	家庭，家族のこと
	２位	家庭，家族のこと	芸術，芸能，趣味的活動
	３位	芸術，芸能，趣味的活動	健康の問題

二　桜楓会について

一　桜楓会への親近感と活動への参加状況

四万を越える桜楓会員は、『桜楓会』にどんな思いを抱いているのだろうか。そして、『桜楓会』と、どんなかかわり方をしているのだろうか。

1　桜楓会への親近感

桜楓会を「非常に身近に感じる」会員は、全体で一五・一%、「時々感じる」会員は四六・二%、「あまり感じない」会員が三八・一%、「非常に身近に感じる」「時々感じる」両者を合わせると、約六割の会員が桜楓会に親近感をもっていることになる。

各期ごとに「非常に身近に感じる」率を見ると、桜楓会の設立、創成の苦楽を共にした第一期がもっとも高く四五・七%、それを受けて苦難の戦時下を過ごした第二期が二六・二%、新旧両制度の雰囲気が共存する新制大学下の第三期が一六・四%、学園騒動が各大学を席捲

%

3　期 新1～10回	4　期 新11～20回	5　期 新21～26回	6　期 新27～33回
287	353	291	440
16.4	6.2	2.4	4.3
51.6	46.7	41.2	39.3
31.4	47.0	55.7	55.7
0.7	—	0.7	0.7

第29表　桜楓会への親近感

回生 / 親近度	総数 2086		1期 1～28回	2期 29～48回
	実数	%	162	553
非常に身近に感じる	314	15.1	45.7	26.2
時々感じる	964	46.2	43.8	51.9
あまり感じない	794	38.1	9.9	20.8
無答	14	0.7	0.6	1.1

しはじめる世代の第四期、第五期が六・二%、二・四%、そしていちばん若い第六期では四・三%となる。

こうしてみると、第三期を境に、急激に桜楓会への親近感が失われていることに気づく。特に第五、第六期は第一期の四五・七%に比較して、その一割にもみたない数字である。

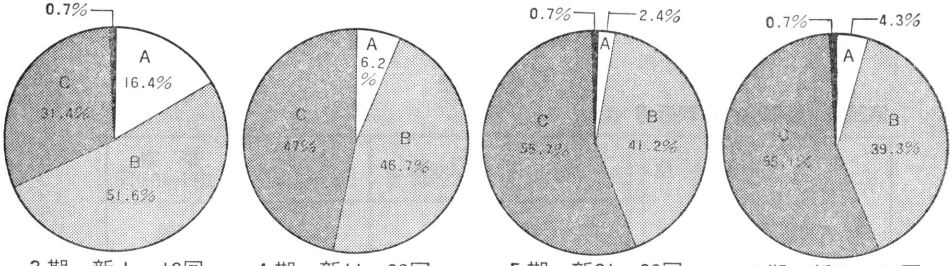
当然のことながら、回生が若くなるに従い、「あまり感じない」層が第二期を境に急増し、第五、第六期では桜楓会を「あまり感じない」層が半数を越え、若い会員の関心の低さを示している。

2　どんな時に桜楓会を思い出すか

では、どんな時に桜楓会が懐しく思い出されているのだろうか。「桜楓新報を受け取った時」が二一・二%と最も多く、次いで「会員の活躍を見聞して」、「行事に参加して」、「会員と出会った時」とつづく。

各期別にみると、表30に示すように、「桜楓新報を受け取った時」を第一にあげたのは、高齢の方々の多い第一期、そして中高齢者層の第四期、就職者が多く、また育児に最も手がかかる者の多い第五、第六期で、〃外出が思うにまかせない〃層に多い。

A非常に身近に感じる　B時々感じる　Cあまり感じない　無答



3期・新1～10回　4期・新11～20回　5期・新21～26回　6期・新27～33回

そうした中で、桜楓会生え抜きの第一期では、

「日常生活のすべてに」（11回）、

「いつも桜楓会の教えを守り、自重自省し、心豊かに生きて九十四歳」（11回）、

「五児をかかえて夫に先立たれてより、母校の教育方針を支えに、桜楓会のご指導に従い、今日に至るので、毎日毎時忘れたことがない」（19回）

など、強い思いを吐露する会員も目につく。

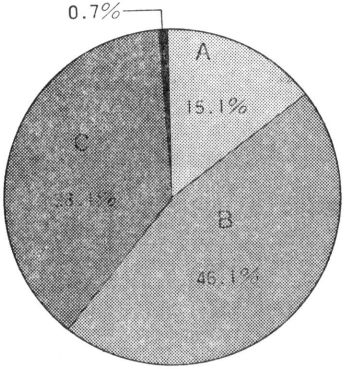
また「会員の活躍を見聞して」「友人との語らいの中で」「職場で桜楓会員と出会って」など、日常生活の中でのきっかけが各期ともに共通して三位から六位にあげられている。そうした中で新制度下早々の第三期で「活動、行事に参加して」と、積極的な理由づけが第一位にあげられ注目される。

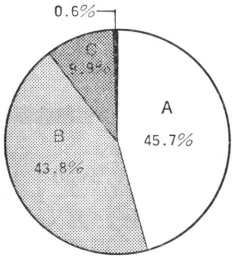
3　桜楓会本部活動・行事への参加状況

約六割の桜楓会員が、「非常に身近に」「時々」桜楓会を思い出していることになるが、そうした桜楓会への認識は、桜楓会活動への具体的な参加となって現れているのだろうか。

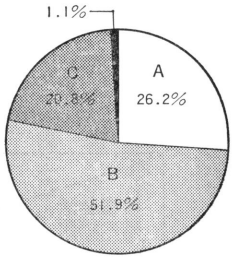
4　期（新11回～20回）	5　期（新21回～26回）	6　期（新27回～33回）
新報を受取った時	新報を受取った時	新報を受取った時
行事に参加して	会員の活躍を見聞して	会員の活躍を見聞して
会員の活躍を見聞して	行事に参加して	行事に参加して
友人との語らいの中で	職場で会員と出会って	友人との語らいの中で
職場で会員と出会って	友人との語らいの中で	職場で会員と出会って

桜楓会への親近感





1期・1～28回



2期・29～48回

まず、桜楓会本部（東京）での活動・行事への参加状況をみてみよう。

「桜楓会活動・行事に参加したことがある」会員は七五七名三六・三%、「参加したことがない」会員は一、二八五名、六一・六%、不参加者が半数を越える。

これは東京での活動・行事であり、距離的な問題、また高齢者も多いことなどを考えると、止むを得ない参加状況といえるかもしれない。

各期ごとに参加率をみると、やはり回生の古い順に参加している者の比率が高く、第一期では六一・一%、第二期が五一・八%、新制度下の第三期が四八・一%、第四期が三〇・五%、若い層の第五期が二一・六%と次第に減少し、いちばん若い第六期では一六・六%となり、第一期の約四分の一の参加状況と激減している。

参加内容について参加者の多い第一位をみると、高齢者の多い第一期が「総会」三八・三%、つづく旧制の第二期が、「桜楓会バザー」二五・七%、新制度下の第三期が、「各種

第30表　桜楓会を思い出すとき

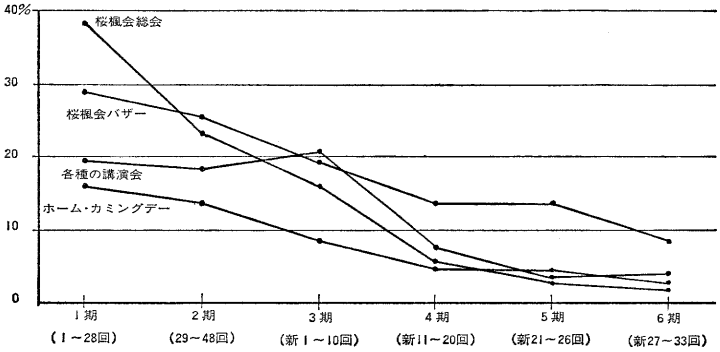
順位＼回生	1　期（1回～28回）	2　期（29回～48回）	3　期（新1回～10回）
1　位	新報を受取った時	会員に会う時	行事に参加して
2　位	会員の活躍を見聞して	会員の活躍を見聞して	会員の活躍を見聞して
3　位	行事に参加して	行事に参加して	新報を受取った時
4　位	毎日毎時	新報を受取った時	会員と職場で出会って
5　位	会員に会う時	職場で会員と出会って	友人との語らいの中で

第31表　桜楓会活動への参加状況

%

回生 / 桜楓会活動の種類	総数	2086	1期	2期	3期	4期	5期	6期
	実数	%	162	553	287	353	291	440
桜楓会総会	271	13.0	38.3	23.1	16.0	5.4	2.7	1.8
成瀬先生ご命日および逝去会員追悼会	119	5.7	29.6	8.1	5.2	1.1	1.7	0.5
各種の講演会	244	11.7	19.8	18.3	20.6	7.4	3.1	3.9
各種の研究会	149	7.1	13.6	10.3	12.5	5.4	2.4	1.8
見学会	105	5.0	13.6	9.2	6.3	2.8	0.7	0.5
家庭工芸展	150	7.2	17.9	11.6	10.1	4.0	2.7	1.4
ホーム・カミング・デー	164	7.9	16.0	13.6	8.4	4.5	4.1	2.5
ゴールデン・パーティ	24	1.2	7.4	1.6	1.0	—	—	—
国際交流の会	48	2.3	6.2	3.6	4.5	0.6	0.3	0.5
桜楓会バザー	366	17.5	29.0	25.7	19.2	13.3	13.4	8.2
ボランティア活動（手話・盲人のための朗読）	22	1.1	3.1	1.3	1.0	1.4	0.7	—
その他	90	4.3	9.9	5.4	5.6	4.8	1.0	1.8
活動に参加したことがない	1285	61.6	38.3	45.8	49.8	69.4	77.0	81.4
無答	44	2.1	0.6	2.4	2.1	3.1	1.4	2.0

（注）多答式のため100%をこえる



の講演会」二〇・六%、第四期「桜楓会バザー」一三・三%、第五期では「桜楓会バザー」一三・四%、いちばん若い第六期はやはり「桜楓会バザー」八・二%となっている。

第二位は、成瀬先生の教えを直接受けたり、その教えが学内に色濃いころ学生生活を送った第一期が「成瀬先生ご命日」の二九・六%、第二期が「総会」の二三・一%、第三期が「桜楓会バザー」一九・二%、第四期「各種の講演会」七・四%、第五期が「ホーム・カミング・デー」四・一%、第六期が「講演会」の三・九%となっている。

こうしてみてくると、若い層にとって「総会」は身近なものではなく、「バザー」「講演会」「ホーム・カミング・デー」など、自分自身の生活と関係深い内容のプログラムに参加する者が多くなっていることに気づく。こうした傾向にも、今後の活動の動向を考える際のポイントがあるように思われる。

4　桜楓会本部機関（事業内容）、施設の利用状況

活動につづいて、桜楓会の機関（事業内容）、施設の利用状況をみてみよう。

「桜楓会の機関（事業内容）、施設を利用したことがある」会員は一、三一八名、六三・二%、「利用したことがない」会員は七一九名、三四・五%。桜楓会本部での活動、行事への参加状況に比べると、利用率は高く、五人中三人は利用していることになる。

また、その利用率を期ごとにみると、第二期の六六・〇%をトップに、最下位の第五期の五四・六%まであまり期ごとの差がなく、利用されている。

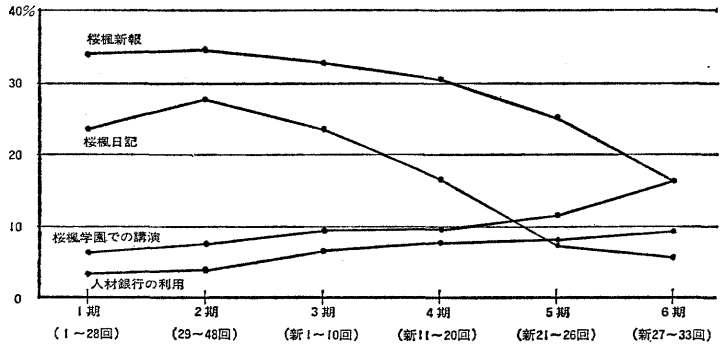
その利用種目の第一位、第二位をつづけてあげてみると、高齢者の多い第一期が「桜楓新報」の三四・〇%、

第32表　活動機関，施設の利用状況

%

回生 / 活動機関，施設	総数	2086	1期	2期	3期	4期	5期	6期
	実数	%	162	553	287	353	291	440
桜楓新報の発行	592	28.4	34.0	34.5	32.8	30.6	25.1	16.1
桜楓会会員名簿の発行	493	23.6	32.1	29.3	24.0	23.8	21.0	14.8
桜楓日記の発行	364	17.4	23.5	27.8	23.7	16.4	7.2	5.7
結婚相談	190	9.1	14.2	15.6	8.4	5.1	7.2	4.1
人材銀行による就職アルバイトの指導と紹介	137	6.6	3.1	3.8	6.6	7.9	7.9	9.3
桜楓学園での講座	218	10.5	6.2	7.4	9.8	9.9	11.3	16.1
桜楓会保険代理部	52	2.5	3.7	4.5	2.8	2.3	0.3	0.9
実業部	461	22.1	15.4	12.3	16.4	15.3	26.5	43.2
食堂	389	18.6	17.9	18.1	20.6	16.4	19.9	19.3
桜楓会夏期寮(三泉寮)	267	12.8	22.2	14.5	11.5	7.4	7.6	15.9
桜楓会館の各室，ロビーの使用	506	24.3	30.2	33.3	34.1	30.6	7.9	10.0
その他	17	0.8	1.9	0.4	1.4	0.6	1.0	0.7
活動，施設を利用したことがない	719	34.5	32.1	30.4	32.8	34.6	44.0	35.2
無答	49	2.3	3.7	3.6	2.4	2.3	1.4	0.9

(注)　多答式のため100%をこえる



「桜楓会名簿」の三二・一%、つづく旧制の第二期がやはり「桜楓新報」で三四・五%、「桜楓会館の使用」三三・三%、新制度下の第三期が「桜楓会館の使用」三四・一%、「桜楓新報」三二・八%、第四期では「桜楓新報」「桜楓会館の利用」が三〇・六%で並び、若い層の第五期では「実業部」二六・五%、「桜楓新報」二五・一%、第六期「実業部」四三・二%、「食堂」一九・三%となっている。

このうち第五期、第六期の「実業部」「食堂」の利用状況については、設問自体の不徹底さが現われて、学生時代の体験が組み込まれ、高い利用率となっているのかもしれない。しかしここでも、「行事・活動への参加」でふれたように、日常生活に身近な施設・機関（事業内容）が、より利用されているということはいえるであろう。

以上の利用状況のうち、「桜楓新報」の利用率が若い層（第五、第六期）で減少していることが注目される。これは「桜楓新報」が桜楓会費未納者には配布されていないことを考えると、年齢層が若くなるに従って、会費未納者が増加していることと関連がつけられるであろう。

逆に、桜楓学園の利用は若い回生に増加の傾向をみせ、学園の発展を示し、人材銀行の利用も、学園には及ばないながら増加のきざしをみせている。

5　支部活動への参加状況

これまでみてきた活動、活動機関、施設が東京の桜楓会本部における活動、活動機関、施設であったため、地方在住の会員には「参加したことがない」「利用したことがない」会員が多かったことは当然であろう。

では地方において、会員は支部活動にどんな参加の状況をみせているだろうか。

第33表　支部活動への参加状況　%

支部活動の種類＼回生	総数 2,086 実数	%	1期 162	2期 553	3期 287	4期 353	5期 291	6期 440
支部総会	682	32.7	64.2	53.7	43.6	24.1	12.0	8.2
親睦会	538	25.8	54.9	43.2	32.1	20.7	8.9	4.3
講演会	303	14.5	34.0	27.5	16.7	9.1	1.7	2.5
研究会	70	3.4	10.5	5.6	5.2	1.4	0.3	0.2
講習会	142	6.8	17.3	12.7	9.4	3.1	1.7	0.2
見学会	189	9.1	19.1	19.0	10.5	5.4	0.3	0.7
ボランティア活動	64	3.1	6.2	6.0	4.9	1.7	0.3	—
その他	52	2.5	3.7	3.8	3.5	3.1	0.7	0.5
参加したことがない	1216	58.3	24.7	35.3	47.7	64.3	80.8	86.8
無答	19	0.9	1.2	2.0	0.3	0.6	0.3	0.5

（注）多答式のため合計は100％を越える

支部活動に「参加したことがある」会員は八五一名、四〇・八％、「参加したことがない」会員は一、二一六名、五八・三％に当たり、本部での活動参加率より参加率は四・五％高くなっている。

各期ごとに参加状況をみると、大先輩の第一期が七四・一％といちばん参加率が高く、ついで第二期の六二・七％、新制度下の第三期が五二・二％でそれにつづき、以下順次参加率は下がって第四期三五・七％、若い層の第五期では一八・九％、第六期一二・七％と減少する。

しかも、本部での活動への参加状況と比較して、全般的に参加状況が高くなっているにもかかわらず、第五期、第六期では参加率が約三％低下し、不参加者が逆に八割を越している。

それに対して、第一期では一三％、第二期で一〇・九％と参加率が増加しているのは、地域の活

動がより身近ということに原因があるものと考えられる。

その参加活動の内容については、どの期も表33にみるとおり、第一位が「支部総会」、第二位が「親睦会」であり、「講演会」がそれにつづいている。しかし、若い層の第五期、第六期では一位、二位とはいってもその参加率は他の期とは大きく違い、非常に低い参加状況となっている。「支部総会」についてみれば、高齢者の多い第一期の六四・二%に比べて第五期では一二%、約五分の一、第六期ではさらに減少して八・二%、第一期の参加率の約八分の一という低率である。

他の期の参加状況についてみると、「総会」に関していえば、第二期が五三・七%、第三期が四三・六%、第四期に入ると減少して二四・一%と参加率は若くなるに従って減少している。

「親睦会」への参加も、トップの参加率を誇るのが第一期で五四・九%、第二期が四三・二%、以下これも次第に減少して第三期が三二・一%、第四期が二〇・七%、若い層ではとうとう一割をわって第五期が八・九%、第六期が四・三%と低率になっている。

以上のように桜楓会の全般的な活動（本部での行事、活動、施設、機関、支部活動）への参加状況をみてきたが、「参加したことのある」会員は一六一九名、全体の七七・六%に当たるが、このうちの一、一二七名、五四・%が桜楓会を「身近に感じて」いる。

つまり、当然のことながら、桜楓会を「身近に感じる」会員の活動への参加率が、「あまり身近に感じない」会員より多くなっている。

親近感の強さが、活動への参加につながるのか、活動に参加することで親近感が生まれてくるのか。戦後に母校を卒業した新制の回生の中からは、

「人材銀行のお世話で就職し現在に至るので」（新15回）

「偶々講演会に出席したところ、なごやかで楽しかったので、以来桜楓会びいきに」（新20回）

など、行事への参加が、桜楓会へのつながりを深めたと記すものが多く、活動や行事が、桜楓会と会員をつなぐ大きな媒体となっていることはまちがいないものと考えられる。

その意味で、「どんな時に桜楓会を身近に感じるか」の設問に、新制度下卒業の第三期の会員が、「活動、行事に参加して」をトップにあげていた点に、改めて注目しておきたい。活動への参加率もまた高かった期である。

二　桜楓会活動へ不参加の理由

桜楓会の活動は、東京本部における活動、施設の開放、機関（事業内容）の利用、そして支部活動と考えられるが、そうした活動に参加したことがない会員は、何故、こうした活動に参加しないのだろうか。各活動ごとにその不参加の理由をみてみよう。

1　桜楓会本部活動に不参加の理由

まず、桜楓会本部での活動、行事、施設、機関（事業内容）に参加、利用したことのない会員は、一、四〇二名、回答者総数の六七・二％に当たる。

その主な理由は、各期ともに共通しているが、全体で「時間的余裕がない」が四六・九％、「遠くて参加できない」が四五・七％で、不参加の理由の大半をしめ、これにつづいてその他には「情報不足で」が一四・四％、「外出ができない」が一二・二％、「こうした活動のあることを知らない」一一・二％、「関心のある企画がない」九・三％とつづく。

一部でみてきたように、桜楓会員が「社会活動」「生涯教育」にかなりの意欲をもって参加しており、時間的に多忙であろうこと、第五期、第六期では「育児に追われている」会員、職場で仕事に追われている会員も多いであろうことが考えられ、また東京での活動ということで、距離的な面での参加のしにくさもあり、この不参加者の数は当然でもあろう。

そうした中で、高齢者の多い第一期で「外出ができない」が「時間的余裕がない」と並んで二位に、第二期で

第34表　活動機関，施設への不参加理由

%

回生 / 不参加理由	該当者 1402		1期	2期	3期	4期	5期	6期
	実数	%	79	294	168	258	234	369
活動，機関，施設のあることを知らない	157	11.2	3.8	7.5	10.1	7.8	11.5	18.4
情報が不足している	202	14.4	2.5	12.6	16.1	14.7	14.1	17.6
時間的余裕がない	657	46.9	29.1	51.0	45.8	43.0	46.6	50.7
関心のある企画がない	130	9.3	7.6	6.5	11.3	7.4	8.5	12.7
資格取得など役に立つ企画がない	52	3.7	1.3	2.0	3.6	3.9	5.1	4.6
遠くて参加できない	641	45.7	60.8	49.7	47.0	48.1	48.3	35.5
外出ができない	171	12.2	29.1	12.6	8.3	8.5	21.4	6.8
その他	171	12.2	21.5	11.6	11.9	10.5	10.7	13.0
無答	112	8.0	2.5	7.8	6.0	11.2	5.6	9.5

（注）多答式のため合計は100％を越える

一二・六％で三位に、若い層の第五期でも二一・四％で三位にあげられている点が注目される。

高齢者の層の中では、「出席したいが出かけるためには人さまに世話をかけ、心苦しい」（11回）、「かつては参加したが、残念ながらもう外出できないので」（11回）と、老齢のための外出の不自由を訴える声が多く、中年齢層では、

「寝たきりの姑の世話で、私自身も外出はできない」（39回）、「病気がちの主人の世話や経済的にも恵まれず、外出は不可能」（23回）

などの理由が目立つ。

若いグループからは、

「育児に手いっぱいで託児施設がないかぎり、外出はできない」（新20回）、

「職場から抜け出せないので」（新22回）

など、「外出が不自由」の内容は、このようにさまざまである。職場、子育てに追われる若い世代、かなり外出

も自由になる中年の世代、そして身内の介護に追われるやや年齢の高い中年世代、やがて自身外出を断念せざるを得ない高年齢の世代……と、女性の生活サイクルをここにもみる思いがする。

もう一つ、注目したいのが、新制度下の第三期以降、「情報不足で」「こうした活動を知らないので」とする会員がしだいに増加し、いちばん若い第六期に至っては、「こうした活動を知らないので」一八・四％、「情報が不足で」一七・六％となり、第一期の「こうした活動を知らないので」の三・八％、「情報が不足で」の二・五％に比較すると、ほぼ六倍もの数にのぼっている。

「このアンケートによって桜楓会の活動をはじめて知った」（新29回）、

「どうすればこうした活動の予定を知ることができるのですか」（新28回）

といった会員が、事実増加している状況なのである。

この情報の不徹底が、桜楓会活動の隘路の一つであると考えられる数字といえる。

また、いちばん活動に参加しやすいと思われる第三期といちばん若い第六期で「関心のある企画がない」がかなり多く、これもあわせて考えさせられる点である。

2　支部活動に不参加の理由

支部活動不参加の理由は何であろうか。支部活動に参加したことがない会員は、一、二一六名、五八・三％に当たっている。

その不参加の理由は、本部活動不参加の理由と同じく、「時間的余裕がない」の五〇・八％をトップに、「近くに支部があるかどうかわからない」三四・一％、「支部はあるが案内がこないので」一九・七％、「関心のある企

第35表　支部活動不参加の理由

%

回生 / 不参加理由	該当者数 1216		1期	2期	3期	4期	5期	6期
	実数	%	40	195	137	227	235	382
近くに支部がない	63	5.2	7.5	13.3	5.8	4.8	3.0	2.1
支部の有無分らない	415	34.1	5.0	17.9	35.0	36.6	38.7	40.8
支部の案内がこない	239	19.7	10.0	12.3	18.2	18.9	22.1	23.8
支部の活動がない	35	2.9	2.5	5.6	2.2	1.8	2.6	2.6
時間的余裕がない	618	50.8	22.5	54.4	48.2	46.7	54.9	52.9
参加したい企画がない	158	13.0	15.0	12.8	10.9	12.3	9.8	16.0
資格取得の企画がない	26	2.1	2.5	2.1	0.7	2.2	1.3	3.1
外出が不自由	117	9.6	32.5	12.3	6.6	6.2	14.9	5.8
その他	208	17.1	42.5	17.9	20.4	15.4	12.3	16.8
無答	14	1.2	2.5	1.0	2.9	1.3	0.4	0.8

注　多答式のため合計は100％を越える

第36表　支部設置の希望の有無

%

回生 / 支部設置希望度	該当者数 474		1期	2期	3期	4期	5期	6期
	実数	%	5	60	55	94	98	162
支部設置希望	245	51.7	20.0	30.0	50.9	46.8	59.2	59.3
支部設置希望無	27	5.7	20.0	8.3	9.1	9.6	3.1	2.5
どちらでもいい	182	38.4	40.0	50.0	38.2	38.3	36.7	35.2
無答	20	4.2	20.0	11.7	1.8	5.3	1.0	3.1

画がないので」一三・〇%とつづく。

各期ごとに不参加の理由の第一位、第二位をみると、ここでも高齢者層の第一期で一位「参加したいが、外出が不自由なので」が三二・五%、「時間的余裕がない」が二二・五%で二位。中高年齢層の第二期の一位は「時間的余裕がない」五四・四%、「支部があるかどうかわからないので」が一七・九%。

新制度下の第三期以降いちばん若い第六期まで、一位は全く同じで「時間的余裕がない」となり、第三期は四八・二%、第四期四六・七%、第五期五四・九%、第六期五二・九%となる。二位も同じく「支部があるかどうかわからないので」で、第三期三五・〇%、第四期三六・六%、第五期三八・七%、そして第六期が四〇・八%。

第二期以降次第に増加してくるこの「支部があるかどうかわからないので」と同じく、「支部はあるらしいが案内が、こないので」が第二期一二・三%、第三期一八・二%、第四期一八・九%、第五期二二・一%、第六期二三・八%と、若い層になるに従って増加してきている。

35表にみるように、広い意味で「情報不足で」による、不参加を示す数は、本部活動への不参加の理由でみた「情報不足で」より、増加していることに気づく。

さらに注目されるのは「支部がない」「支部があるかどうかわからない」理由で支部活動に不参加の会員四七四名中、「支部があればよい」と支部設置を希望する会員が二四五名、五一・七%もいることである。(36表参照)

各期ごとに支部設置の希望状況をみると、さすが「支部があるかどうかわからない」会員がわずか五%しかない最高齢層の第一期はともかく、中高齢層の第二期で三〇・〇%、新制度の第三期で五〇・九%と半数を越

え、中年層の第四期で四六・八%と五割を割るものの、若い層では再び第五期で五九・二%、第六期で五九・三%と「支部設立」希望者が半数を越える。

しかも、「支部はなくてもよい」と消極的な反応を示した者は、若い層の第五期三・一%、第六期で二・五%と少なく、いかに支部を望む声が高いかを示している。

「出身は東京ですが、外国、日本国内どこに行っても会員がおり、不慣れな土地で親切にしていただき、心強かった」(新10回)

「東京在住中は桜楓会のことは気にならなかったが、地方転勤になって、支部に参加したいと痛切に思った」(新15回)

など、環境の変化、生活の変化に伴って一層同窓のふれあいを懐しみ、支部を求める声が、若い層にこそ多いということは、重大であり、またこれからに大きな期待を抱かせる事実である。

桜楓会の諸活動に不参加の会員は、四六七名、二二・四%と多いが、こうしてみてくると、不参加の理由に「情報不足」という点がかなりのウェイトを占め、対応の不備が一つの隘路になっているらしいことが明らかになった。

では問題は、働きかけ、連絡の方法にのみあるのだろうか。会員の桜楓会への希望は、他にないのであろうか。何か改善策が望まれているのだろうか。

三　会員が桜楓会に望むもの

まず、具体的に、活動、施設、機関（事業内容）への希望を各期ごとにみてみよう。自由記述で記入された希望を、各々まとめてみた。

1　希望する活動

各期の希望する活動は37表のとおりであるが、最高齢平均年齢八十歳の第一期で第一に「ボランティア活動の実践」が希望され、驚かされる。「外出も不自由な」この高齢者層が、一般的に、常識的に考えられるように「ボランティア活動」をわが身に受けたいというのではないのである。

「自分の恵まれた寮生活を思い出すたびに、地方から上京する若い人たちによい環境をと思い、区政モニターとして環境問題に関心を寄せている。もっと若い桜楓会員も地域での活動に参加してほしい」（5回）

「老人ホームのおしめたたみなど、自分の健康状態の許す範囲で手伝いたい」（12回）

「八十五歳。でも私にもできるボランティア活動があれば」（15回）

「家庭問題で悩む人の相談を受けるなど、適当な活動で参加したい」（18回）

など、体力のつづくかぎり『共同奉仕』に徹しようという明治の意気込みがうかがえる。

第二期から新制度下の第三期以降いちばん若い第六期まで、「地方での本部共催の各種の催し」がトップにならび、「母校の教授を招いての講演会」「シリーズの講演会」など、本部・支部共催の行事開催を望む声は大きい。

その他、「老人問題研究会」が最高齢層の第一期と中年層の第三期で、子供の養育にあけくれる会員の多い第五期で「子供の育て方についてのセミナー」が、職業に就く会員の多い第六期で「仕事をもつ会員の交流会」が望まれ、世代ごとの希望の違いがうかがわれる。

その他、「定例の読書会」を希望する声、「旅行会」を希望する声もあり、その点五十八年度にはじめて行事部が開催し成功をおさめた「三陸地方の旅」（三三八ページ参照）の定着が望まれる。

2　希望する活動機関（事業内容）、施設

「親身の情愛が感じられ、会員とは安心してつき合える」（18回）安心感からか、「総合的な相談室」の希望が各期ごとにみられ、「人材銀行の充実」「支部係の設置」「レジャー施設の紹介・あっせん」などがあげられる。

最高齢層の第一期、つづく中高年層の第二期で「総合的な相談室」が一位に。新制度下の第三期、平均年齢五

5　期（新21回～26回）	6　期（新27回～33回）
地方での各種の催し	地方での各種の催し
子供の育て方についてのセミナー	仕事をもつ会員の交流会
旅行会，読書会	旅行会 食生活に関する会

5　期（新21回～26回）	6　期（新27回～33回）
総合的な相談室	レジャー施設の紹介・あっせん
人材銀行の充実	総合的な相談室
支部係の設置	人材銀行の充実

5　期（新21回～26回）	6　期（新27回～33回）
スポーツ施設	スポーツ施設
会員の宿泊施設	会員の宿泊施設
設備の充実した桜楓館	設備の充実した桜楓館

第37表　活動への希望

回生／順位	1　期（1回～28回）	2　期（29回～48回）	3　期（新1回～10回）	4　期（新11回～20回）
1　位	ボランティア活動の実践	地方での各種の催し	地方での各種の催し	地方での各種の催し
2　位	地方での各種の催し	ボランティア活動の実践	老人問題研究会	ボランティア活動の実践
3　位	老人問題研究会 旅行会	健康教室	ボランティア活動の実践 読書会	読書会

第38表　活動機関（活動内容）への希望

回生／順位	1　期（1回～28回）	2　期（29回～48回）	3　期（新1回～10回）	4　期（新11回～20回）
1　位	総合的な相談室	総合的な相談室	人材銀行の充実	総合的な相談室
2　位	病院などの紹介	消費生活研究機関	支部係の設置	人材銀行の充実
3　位	健康相談室	レジャー施設の紹介・あっせん	総合的な相談室	レジャー施設の紹介・あっせん

第39表　桜楓会への希望

回生／順位	1　期（1回～28回）	2　期（29回～48回）	3　期（新1回～10回）	4　期（新27回～33回）
1　位	老人ホーム	会員の宿泊施設	設備の充実した桜楓館	会員の宿泊施設
2　位	会員の宿泊施設	老人ホーム	会員の宿泊施設	スポーツ施設
3　位	談話室	設備の充実した桜楓館	老人ホーム	三泉寮の一般開放

十歳前後、再就職の希望の多い第三期では「人材銀行の充実」が一位。つづくやや中年の第四期、若い層の第五期で、「総合的な相談室」が再び一位に。いちばん若い第六期では「レジャー施設の紹介・あっせん」が一位にあげられ、若い世代らしさを見せている。

その他、第三期、第五期で、「地方と本部のパイプ役として、本部内に支部係の設置」が望まれ、「本部と支部の交流を積極的に行い、本部は支部の要望に答えられるような配慮をしてほしい」（27回）という地方在住会員の希望が強い。

また、希望する施設としては、高齢化時代を反映して「老人ホームの設立」のほか、「会員の宿泊施設」「設備の充実した桜楓館」「スポーツ施設」が各期に共通してみられる。

高齢者層の第一期では「老人ホーム」が一位にあげられている。

「会員のための養老施設について考えていただきたい」（24回）

「安心して自分の信ずる道を歩くことができるよう、老後の生活の保障をいま桜楓会が考えては如何。かつての桜楓会アパートメントハウスのように」（25回）

と希望をよせる会員が少なくない。「老人ホーム」を望む声は、中・高齢年層の第二期、第三期にも

5　期（新21回～26回）	6　期（新27回～33回）
伝統に支えられ活発な活動でうれしい	新しい時代にそった活動を
新しい時代にそった活動を	伝統に支えられ活発な活動でうれしい
卒業生増加への対応を十分に	地方会員への還元を
社会的活動を積極的に	有職者も参加できる活動を
地方会員への還元を	新入会員への働きかけを

みられる。

第二期の一位は、「会員の宿泊施設」。

「東京での総会、講演会などにもぜひ出席したいが、宿泊施設の予約が自分ではとれず、出席できない。もう一度元のように桜楓館に宿泊施設を」（30回）

と、桜楓館設立時の様子を知る会員の中に、宿泊ができた当時を懐しみ、宿泊施設を希望する声が多い。

桜楓会館の利用率がトップだった第三期では「設備の整った桜楓館」設立への期待が強く、第四期では、「会員の宿泊施設」を望む声がやはり強い。そして若い第五期では「スポーツ施設の開放」が望まれ、いちばん若い第六期では、同じく「スポーツ施設の開放」が、第五期の二倍強の会員によって希望され、「レジャー施設の紹介・あっせん活動」を希望した世代らしい。

第40表　桜楓会への意見・希望

順位＼回生	1　期（1回～28回）	2　期（29回～48回）	3　期（新1回～10回）	4　期（新11回～20回）
1　位	伝統に支えられ活発な活動でうれしい	伝統に支えられ活発な活動でうれしい	伝統に支えられ活発な活動でうれしい	地方会員への還元を
2　位	精神的な支えである	地方会員への還元を	精神的な支えである	精神的な支えである
3　位	大学と協力した活動を	精神的な支えである	社会的活動を積極的に	新しい時代にそった活動を
4　位	新入会員への働きかけを	寄付などの負担を軽く	地方会員への還元を	伝統に支えられ活発な活動でうれしい
5　位	寄付などの負担を軽く	社会的活動を積極的に	卒業生増加への対応を十分に	有職者も参加できる活動を

同時に若い会員からは「託児室があればどこでも参加したい」(新25回)と、託児施設を望む声も多い。「三泉寮の一般開放」、家族での使用を望む声も見られるのは、軽井沢が若き日の思い出深い場所であり、家族にも同一の体験を、との愛着からであろう。

3　その他、桜楓会への希望

こうした具体的な提案のほかに桜楓会全般に対する会員の希望は、肯定的なものと、各々の期が置かれた状況から生まれた、桜楓会への希望とに大別される。

桜楓会と共に歩みつづけた第一期では、「伝統に支えられた立派な活動ぶりでうれしい」「精神的な支えである」と活動を評価したあとに、「公開講座など、大学と協力した活動を」と希望する者が多い。

第二期では、同じように活動を評価する会員が最も高い比率を示すと同時に、年代的に支部長の多い期らしく「地方会員への還元を」望む声も多い。新制度下の第三期でも「活発な活動ぶり」と評価する会員が多いが、「社会的活動をもっと活発に」と希望する会員がかなり多い。「支部の情報がほしい」と多くの会員が望んだ第四期では、「地方会員への還元を」望む比率が高く、「精神的な支えである」という評価と「新しい時代にそった若い人も参加しやすい活動を」と、桜楓会の活性化を望む声が並んでいる。

若い層の第五期では、「活発な活動ぶりでうれしい」「新しい時代にそった若い人も参加しやすい活動を」「卒業生増加への企画、広報活動などの対応が不十分」と、対応の変化を望む声がほとんど同じ強さでつづいている。

いちばん若い第六期では、「新しい時代にそった若い人も参加しやすい活動を」「活発な活動ぶりでうれしい」「地方会員への還元を」望む声がつづいている。

有職者だけの希望を別にみてみると、「活発な活動ぶりでうれしい」、「地方会員への還元を」「新しい時代にそった活動を」につづき、「有職者も参加できる夜間、休日の催しを」と有職者ならではの希望がつづいている。また、「有職者の分野別会合をもってほしい」との希望も目につき、有職者のさらに増加するであろう今後の課題といえるかもしれない。

こうして桜楓会へのさまざまな会員の希望をみてくると、それがかつての桜楓会が行ってきた活動であり、施設であったことに気づく。

「社会に向けてのボランティア活動」は、明治末期の託児所、共励夜学会、大正七年来の禁酒運動であり、「地方での各種の催し」は、母校での研究発表・展覧会（大正十三年・国産品奨励展・昭和三年・女性文化展など）の地方支部での公開であったし、「老人ホームの建設」は、いうまでもなく桜楓会アパートメントハウスそのものといえる。

桜楓会が時代に先がけて実現し、今失っている活動・施設を、今また会員が希望しているわけである。

そうした中で、「人材銀行の充実」「スポーツ施設の開放」など、現代ならではの新たな希望が目につくが、かつて時代を先どりした桜楓会に、それこそふさわしいニードというべきかもしれない。

4、支部活動に対する希望・意見

全体的に「支部の活動を評価する」古い回生の層、新制の早い時期の層の声と、「活動に参加したいが情報不足でどうしたらよいかわからない」と訴える若い回生の層とに意見、希望が二分される。

各期ごとに、みてみよう。

長老格の第一期では、「よく活動していて教えられ、励まされる」がかなりの数を見せているとともに、「若い人の参加が少ない。何とか若い人の参加しやすい活動を」との声が、最高齢の会員の中から逆に出ていて注目される。桜楓会活動に「ボランティア活動を」と望んだ期らしく、ここでも「地域に根ざしたボランティア活動」を希望する声が多い。

第二期でも「よく活動している」とかなりの評価がみられ、ここでも「若い人の参加を」と、支部の中枢としての若い会員の不参加を嘆く苦衷を反映したと思われる希望がつづく。

第三期では「よく活動している」とほぼ同じ比率で「どうしたら多くの会員に参加してもらえるか、考えるべき時である」と自省をこめた提言がつづく。

そして第四期以降、若い層に至る第六期まで、「支部についての情報がほしい」がともにトップに並ぶ。第四期では「若い人の参加しやすい活動を」「活動が一部の人に限られている」がつづくが、第五、第六期では、「支部の活動ぶりをもっと紹介してほしい」と、情報提供をのぞむ声が強く、いかにこうした若い層が、生活の場に近い支部活動への参加の方法を求めているかを明らかにしている。古い世代からは参加を求められている若い層が、逆に支部に参加したいと望んでいるのである。支部活動不参加の理由として「支部があるかどうかわからないので」をあげ、「支部がほしい」と訴えた若い層の声と重ね合わせて考えると、一

5　期 （新21回～26回）	6　期 （新27回～33回）
支部についての情報がほしい	支部についての情報がほしい
支部の活動を紹介してほしい	支部の活動を紹介してほしい
入部の方法がわからない	若い人の参加を

第41表　支部活動への意見・希望（上位3位）

順位＼回生	1　期（1回～28回）	2　期（29回～48回）	3　期（新1回～10回）	4　期（新11回～20回）
1　位	よく活動していて励まされる	よく活動していて励まされる	よく活動していて励まされる	支部についての情報がほしい
2　位	地域に対する奉仕活動を	若い人の参加を	多くの人が参加しやすい体制を	若い人の参加を
3　位	若い人の参加を	本部と支部が連絡を密に	活動が一部の人に限られている	活動が一部の人に限られている

層支部の情報提供の必要性が感じられる。

「むかし、支部の者は随分親しく結ばれていましたが、社会が忙しくなったためか、お互い遠い存在となり、今後の桜楓会はどうなっていくのか心配です」（29回）

「若い方が地元に帰ってこられず、支部会員が老齢化しているのが現状、それなりにまとまりはあるが、一面若い方々が出席しにくい原因になるのでは――」（新5回）

と、支部の抱える問題を案ずる声とともに、

「どの支部に属するかわからないので連絡がとれず困っている」（新13回）

という声が重なり、幅広い年代層の会員を有する桜楓会・及び支部の抱える種々の問題の複雑さをうかがわせている。

また、本部からの働きかけを望む声が第二期にみられるが、桜楓会の活動への希望の中に「本部・支部共催の行事」をといった高い希望があったことと考え合わせると、これからの課題として考えていくべき問題であろう。

5　桜楓新報への希望

桜楓新報は桜楓会と会員をつなぐ重要なパイプである。その桜楓新報に対しては、全般的に「情報がいろいろあってよい」「懐しく楽しみにしている」会員が多く、その他に「内容に新鮮味を」「紙面が型にはまりマンネリ化」といった一層の検討、工夫を望む声がつづく。

各期ごとにみると、「桜楓新報を見るたびに桜楓会を思い出す」会員がいちばん多かった最高齢の第一期では、「情報がいろいろあってよい」「懐しく楽しみにしている」「母校のことがわかってよい」と肯定的な感想がつづく。

そして第二期以降第六期まで、「懐しく楽しみにしている」「情報がいろいろあってよい」「母校のことがわかってよい」と桜楓新報を楽しみに待つ声と、「紙面が型にはまりマンネリ化」を指摘し、「内容に新鮮味を」といった希望が順位をかえながらつづいている。

そうした中で、新制度下の第三期で「入手していない」が二位にあげられ、考えさせられる。「入手していない」は、第二期では五位に、第四期で三位に、若い第五期でも三位にあげられ、い

5　期 （新21回～26回）	6　期 （新27回～33回）
懐しく楽しみにしている	懐しく楽しみにしている
情報がいろいろあってよい	母校のことがわかってよい
入手していない	情報がいろいろあってよい
内容に新鮮味を	内容に新鮮味を
母校のことがわかってよい	入手していない

ちばん若い第六期では五位を占め、会費納入率が五割を割る状況をうかがわせている。

また、母校での思い出がいちばん鮮明であろう若い第六期で「母校のことがわかってよい」が二位にあげられ、母校へのきずなの深さが桜楓会員の共通の土壌であることを改めて感じさせる。

前述したとおり、「桜楓会をどんな時に思い出すか」の設問に、「桜楓新報を受け取ったとき」が、外出が不自由になりがちの老齢者の第一期、子育てに追われる全員が多かったり、就職者の多い、第四、五、六期でトップにあげられていた事実と合わせ、新報に寄せる思いは深く、それだけにその責任も重大である。

「老齢と不健康のため、会合等に出席できず新報が何より楽しみ」(21回)

「熟読。世界の情勢も新聞テレビと異る同窓生による見聞あり。お陰で楽しみつつ、老化防止に役

第42表　桜楓新報への感想・希望

順位＼回生	1　期（1回～28回）	2　期（29回～48回）	3　期（新1回～10回）	4　期（新11回～20回）
1　位	情報がいろいろあってよい	懐しく楽しみにしている	情報がいろいろあってよい	懐しく楽しみにしている
2　位	懐しく楽しみにしている	情報がいろいろあってよい	入手していない	情報がいろいろあってよい
3　位	母校のことがわかってよい	内容に新鮮味を	懐しく楽しみにしている	入手していない
4　位	旧師の消息を	母校のことがわかってよい	母校のことがわかってよい	母校のことがわかってよい
5　位	母校の紹介をもっと	入手していない	紙面が型にはまりマンネリ化	紙面が型にはまりマンネリ化

立っている」（21回）

といった声とともに、「もっとグラフィックにされてはいかが」（新3回）といった意見、幅広い会員層を反映して「老齢者のために字を大きく」（17回）、「若い人向きにもう少し楽しく」、その他、母校の授業紹介を、就職状況を、地方で地道に活躍する会員、若い会員の紹介を……と多種多様の希望が寄せられている。

明治三十七年六月二十五日創刊された『家庭週報』は、桜楓会の機関紙であるとともに、女性の教養を高めるための啓蒙紙を目指して編集され、桜楓会の内部連絡としては『桜楓会通信』、『花もみぢ』が併行して発行されていた。『家庭週報』は「女子教育」発展のためのパイオニアの役目を果たしていただけに、主張があり、論説があり、会員の時代に即した新しい研究が発表され、母校の研究活動が各会員の家庭で活用されていく、といった有機的なつながりがあった。

家庭週報から桜楓新報へ、週刊から月刊にかわると同時に、『女子大通信』『花もみぢ』もないいま、桜楓新報の限られた紙面に多くを望むことに無理があるのかもしれないが、

「家庭週報と比べるとあまりに違いすぎます。週報には主張がありました。見習ってください」（33回）

「内容の選択をもっと厳密に。まとめてよい内容はもっと短くしてもよいのでは」（35回）

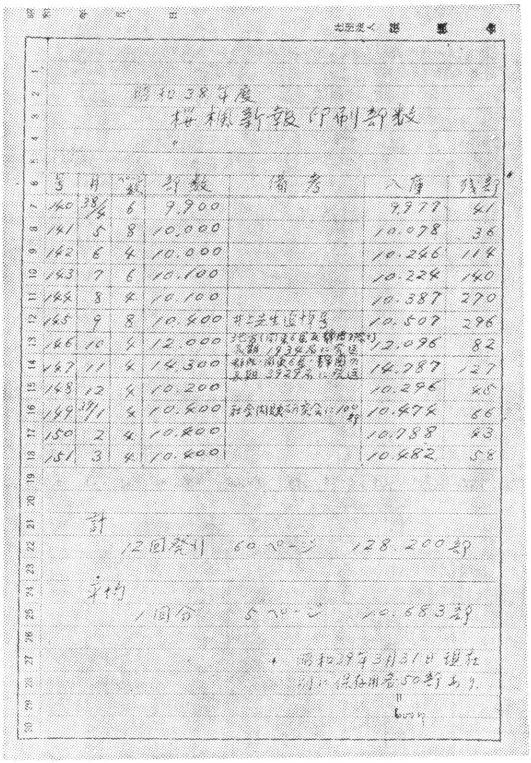
といった意見に耳を傾けることも、八十一年に向けての新たなステップといえるのではないだろうか。

また、会の連絡事項は別紙にはできないのであろうか。

「こは新聞ありて記事あるにあらず、記事ありて新聞あるなり。かつその特色としては進歩的なるべし。また常に研究的態度をとり、空論に走らず、空理に耽らず、実際に近かるべきことを期し、凡て記事は正確公平なるべ

し（後略）」

成瀬先生が家庭週報に望まれた発刊のはなむけの言である。



昭和38年度
桜楓新報印刷部数

号	月	頁数	部数	備考	入荷	残部
140	38/4	6	9,900		9,977	41
141	5	8	10,000		10,078	36
142	6	4	10,000		10,246	114
143	7	6	10,100		10,224	140
144	8	4	10,100		10,387	270
145	9	8	10,400	第三生産特号	10,507	296
146	10	4	12,000	地区別四分割使用のため 実数 1934冊に発送	12,096	82
147	11	4	14,300	都内 四分割使用のため 実数 5922冊に発送	14,287	127
148	12	4	10,200		10,296	48
149	39/1	4	10,400	社会問題研究会に10部	10,474	66
150	2	4	10,400		10,488	43
151	3	4	10,400		10,482	58

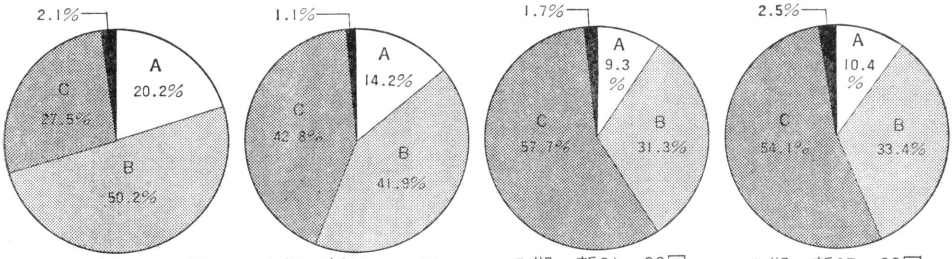
計
12回発刊　60ページ　128,200部

平均
1回分　5ページ　10,683部

＊ 昭和39年3月31日現在
別に保管用者50部あり。

後述するが，『桜楓新報』は会費未納会員にも，一年に一度，発送されていた。
それを示す，『桜楓新報』印刷部数表。（昭和38年）

Aよく思い出す　B時々思い出す　Cあまり思い出さない　無答



3期・新1～10回　4期・新11～20回　5期・新21～26回　6期・新27～33回

四　母校日本女子大学と桜楓会

一回生から新制三三回生まで、長い八〇の回の各々の桜楓会に対する認識、希望、意見をみてきたが、さまざまの回に共通するものは、当然のことながら母校を一にするという事実である。

では、母校について会員はどんな思いをいだいているのだろうか。

母校の教育の理念は「信念徹底」「自発創生」「共同奉仕」の三大綱領に集約される。この三大綱領は卒業後、卒業生の心の中に、その中にどう生きつづけているのだろうか。

1　三大綱領について

桜楓会への親近感をはじめに聞いたように「三大綱領を思い出すことがあるか、ないか」を聞いてみた。

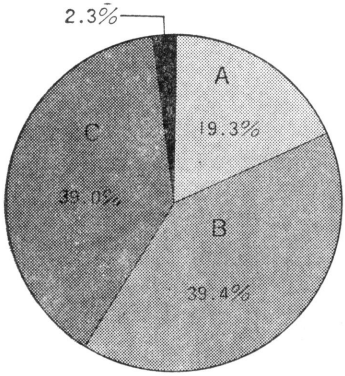
結果は表43のとおりである。

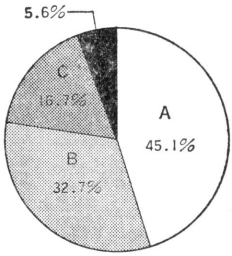
「三大綱領をよく思い出す」会員は、四〇三名、一九・三%、「時々思い出す」は八二二名、三九・四%、「あ

%

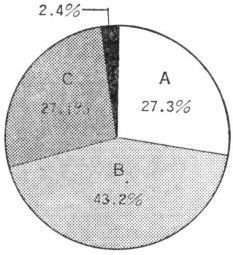
4期（新11回～20回）	5期（新21回～26回）	6期（新27回～33回）
353	291	440
14.2	9.3	10.0
41.9	31.3	33.4
42.8	57.7	54.1
1.1	1.7	2.5

三大綱領への思い





1期・1～28回



2期・29～48回

まり思い出さない」が八一三名、三九・〇%である。「よく思い出す」「時々思い出す」を加えると、一、二二五名、約六割の卒業生が「三大綱領を思い出す」ことがあることになる。

各期ごとにみると、「よく思い出す」のトップは、ここでも大学創立期に学生時代を送った第一期で、四五・一%、つづいて旧制度下の第二期二七・三%、新制度下の第三期になるとやや減少して二〇・二%、つづく第四期は一四・二%とさらに減少し、若い第五期で一段と減少して九・三%、いちばん若い層でやや増加するものの一〇・〇%となる。

「時々思い出す」は、第一期が三二・七%、第二期、第三期と増加して四三・二%、五〇・二%、第四期以降また減少して四一・九%、第五期三一・三%、第六期三三・四%となる。

「あまり思い出さない」層は、第一期で一六・七%、以下少しずつ増加して第二期で二七・一%、第三期二

第43表　三大綱領について

回生 ＼ 綱領への思い	総数		1期（1回～28回）	2期（29回～48回）	3期（新1回～10回）
	実数	%	162	553	287
よく思い出す	403	19.3	45.1	27.3	20.2
時々思い出す	822	39.4	32.7	43.2	50.2
あまり思い出さない	813	39.0	16.7	27.1	27.5
無答	48	2.3	5.6	2.4	2.1

七・五%、第四期四二・八%、そして若い層の第五期では五七・七%と「思い出さない」層が五割を越え、いちばん若い層では五四・一%とここも五割を越える会員が、「三大綱領を思い出すことがない」結果となっている。

ここで思い出されるのが、「桜楓会を身近に感じる」層が、期を追うごとに減少し、若い第五期、第六期で、「身近に感じない層」が逆に増加して五割を越えていたことである。

三大綱領についても、古い回生ほど思い出す機会が多く、回生が若くなるごとにその層は減少し、逆に「思い出さない」層が増加してついに第五期、第六期で「思い出さない」が五割を越し、「桜楓会への親近感」と全く同じ推移を見せていることである。

この第五期の回生は学園騒動まっただ中に学生生活を送り、伝統を否定することで新しい流れを求めていたことを思えば、この数字はむしろ当然の一つの時代の証といえるであろう。

ただ、注目したいのは、どちらもいちばん若い第六期で、五割を越すというものの「思い出さない」「あまり身近に感じない」層がやや減少し、「三大綱領を思い出し」「桜楓会を身近に感じる」層がわずかながら増加して、何か明日への期待をつなぐことができることである。

5　期 新21回～26回	6　期 新27回～33回
子供を育てるなかで	苦境にたったとき
自分の生き方を考えるとき	女子大という名を見聞するとき
苦境にたったとき	自分の生き方を考えるとき

2　どんな時に三大綱領を思い出すか

では、どんな時に「三大綱領をよく」「時々」思い出しているのだろうか。

自由記述で記された回答をまとめてみると、表44のとおりである。

大学の創立期をともに過ごした第一期では、一位が「恩師を思い出すとき」、

第44表　三大綱領を思い出すとき

順位＼回生	1　期 1回 ～ 28回	2　期 29回 ～ 48回	3　期 新1回～10回	4　期 新11回～20回
1　位	恩師を思い出すとき	苦境にたったとき	苦境にたったとき	子供を育てるなかで
2　位	日常生活の糧	恩師を思い出すとき	折にふれて	苦境にたったとき
3　位	苦境にたったとき	日常生活の糧	子供を育てるなかで	折にふれて

二位が「日常生活の糧として」、三位が「苦境にたったとき」。旧制度下の第二期では、一位が「苦境にたったとき」、二位が「恩師を思い出すとき」、第三位が「日常生活の糧として」とつづく。

こうしてみると、一期、二期には順位は多少変わるものの共通して「卒業後六十五年の生活はこの三大綱領に根を発していることを、五十歳を過ぎてからはっきりと自覚した。生活即女子大学の教えだったのである」(20回)にみられる強い母校との連帯の実感である。

新制度下の第三期以降、多少ニュアンスがかわってくる。第三期の一位は、「苦境にたったとき」、第二位「折にふれて」、第三位「子供を育てるなかで」となり、中年層の第四期で一位「子供を育てるなかで」、二位「苦境にたったとき」、三位「折にふれて」となる。若い層になると、第五期の第一位「子供を育てるなかで」、第二位「苦境にたったとき」、「自分の生き方を考えるとき」が並び、いちばん若い第六期では一位、「苦境にたったとき」、第二位「女子大という名を見聞したとき」、第三位「自分の生き方を考えるとき」とつづく。

旧制度の会員のもつ熱い思いは失われてくるようであるが、第三期以降も、生活体験の中に三大綱領はしっかりと根をおろし、「苦境にたったとき」「子供を育てるなかで」、それは道を拓き、迷いをふっきる際の、指針となっている

ことがはっきり感じられる。

「困った時、悲しい時いつも思い出してはわが身を奮い起たせてきた。この頃は幸福だと思う時にも三大綱領を思い出す」(18回)

「現在の日本にとって、最高の教育理念と思い、この理念に向かい努力しなければと思っている」(23回)

「物事の是か非か決断する時に。お蔭で大きな蹉跌なく今日に至っている」(23回)

「仕事で壁にぶつかったとき。何と私にとっては実行不能な、難かしい理念かと嘆息をつきつつも、それに向かって勇気づけられている」(新13回)

「一つのことを成すには信念徹底が。それを長く継続させる中では自発創生が。グループで行うには共同奉仕の精神が必要と、社会に出て改めて思い知りました」(新15)

5期 新21回〜26回	6期 新27回〜33回
寮生活	クラブ活動
クラブ活動	卒業論文
友人	友人
卒業論文	軽井沢三泉寮
授業・ゼミ	スクーリング

など、体験の中で「三大綱領」が息づいていることが感じられ、私学のもつ校風の伝承がうかがえて心強い。

もう一つ感じられるのは、桜楓会を思い出すときの動機が、前述したように「桜楓新報を受けとったとき」「会員の活躍を見聞して」など、やや心情的な動機であったのに対し、「三大綱領」は体験的に裏づけされた実感の中で、とらえられていることの強さである。

それは母校で三年の、四年のあるいはもっと長い日々を過ごす中で培われた体にしみこんだ心であり、桜楓会への認識は、その活動

第45表　学生時代の思い出

順位＼回生	1　期 1回 ～ 28回	2　期 29回 ～ 48回	3　期 新1回～10回	4　期 新11回～20回
1　位	寮生活	寮生活	寮生活	寮生活
2　位	軽井沢三泉寮	軽井沢三泉寮	軽井沢三泉寮	クラブ活動
3　位	恩師	恩師	授業	軽井沢三泉寮
4　位	運動会	実践論理	恩師	スクーリング
5　位	授業	授業	友人 実践倫理	友人 授業

に参加しない以上、母校への愛着だけをつながりとした、心情的なものに終ってしまいやすい「懐しいが、ちょっと遠い」（新28回）存在であることの証明かもしれない。

3　学生時代の思い出

事実、「学生時代の忘れがたい思い出を」問うた設問では、非常に多くの方々が、しかもこと細かに学生時代の思い出を書き記している。その内容を項目で大きくまとめてみると表45のようになる。

正しくそれは学園史そのものといえるように、創立時に入学した第一期では、「寮生活」「軽井沢三泉寮」「恩師」「運動会」「授業」と開校時の特色があふれ、第二期では同じように「寮生活」「軽井沢三泉寮」「恩師」、そして「実践倫理」「授業」がつづく。

新制度下の第三期では「寮生活」「軽井沢三泉寮」「授業」「恩師」「実践倫理」そして「友人」。第四期に入ると通信学部の発足・通信生卒業の期らしく、「寮生活」「クラブ活動」「軽井沢三泉寮」「スクーリング」「授業」と「友人」が並んでつづく。

若い第五期になると、授業内容の変更があったためか「寮生活」「クラブ活動」「友人」「卒業論文」、そして単なる授業をあげずに

「授業」「ゼミ」の思い出がつづく。いちばん若い第六期では「クラブ活動」「卒業論文」「友人」「軽井沢三泉寮」「スクーリング」となる。

それまでの桜楓会への希望など自由設問に残念ながら無答が多かったことに比較して、この「学生時代の思い出」については、無答は二割余と少なく、成瀬先生の授業、実践倫理、運動会、第二次世界大戦開戦の日の思い出、終戦時の学園のこと、勤労動員の日々、クラブ活動、ゼミ、スクーリング……の思い出など、貴重な思い出が紙面いっぱいに書き込まれ、何年、何十年の日々が流れても学生時代の思い出は色あせることなく、生き生きと生きつづけていることがうかがえて、胸をうたれる。こうしてみてくると、充実した心に迫る日々があれば、必ず母校に寄せる思いは、時代がかわり、諸世相がかわっても、かわるものではないことが感じられる。

同時に桜楓会設立時の一期生が、桜楓会を強く生き生きと思いつづけるのは、あるいは在学時、すでに準会員として活動そのものを体験していることに要因があるのかと、改めて考えさせられる。

このことは、桜楓会が、この母校への強いつながりを〝たて〟に、活動の充実、啓蒙、PRの徹底を〝よこ〟に活動をつづけていけば、必ず活動が広がっていくことを意味してはいないだろうか。

「長い歴史のある日本女子大学はやはり先輩の母校に対する愛情のあふれる、よい大学だと思っています。その愛情を実行に移し、活動を続ける桜楓会は、卒業生と母校、現役学生との交流を深めるためにも、益々発展されますことを心より願っています」(新31回)

若い世代からの希望を実現していくこと、母校との新しいつながり、ふれあいを求めていくことも、八十一年に向けての一つの方向かと考えられる。

三　設立八十一年を迎える桜楓会への期待

これまでみてきたように、桜楓会員は各地で家庭で職場で、社会活動、生涯教育にかなりの意欲をみせて活動していることがわかった。

社会活動への参加の意欲の強さは、大正初期の託児所活動をはじめとして脈々とつながる桜楓会の特色であり、生涯教育学習への意欲の高さも、すでに明治末期に「生涯学生たれ」とおしえられた成瀬先生の遺志そのものである。「自発創生」「信念徹底」「共同奉仕」の大学の理念は、回生により、時代により、環境により、その姿をかえつつも、生涯の理念として会員の生涯に息づいているようにみえる。

そうした会員が桜楓会に望んだものを、アンケートをふまえながらまとめ、八十一年を迎える桜楓会への期待としたい。

1

アンケートにみるかぎり、会員の桜楓会に寄せる意識には、質的な推移が明らかである。

その設立、発展に文字通りの情熱を傾けた最高齢、第一期の会員は、今なお、職業に、社会活動に、生涯教育に、年齢を越えた強じんなバイタリティをみせ、他の回生を圧倒しており、母校創立時の熱情をそのままに感じさせている。しかし、桜楓会活動については、参加することより、『桜楓新報』を楽しみにまたれる会員が大半

となった。

そして桜楓会の理念、組織を「知らない、わからない」と答えた若い世代が、年ごとに増えているのは、見てきたとおりである。

しかし、その世代に、桜楓会との新しいふれあいと、つながりを求める声が噴き出しはじめているのも、また事実である。前述したように、「支部があるかどうかわからない」「支部がほしい」といった若い層の高い希望を考えるとき、具体的で効果的な対応があれば、桜楓会活動への会員の吸収が、かなり可能であると考えられる。

もちろん、桜楓会が手をこまねいているわけではない。

1、新入生の歓迎会、桜楓館内の案内

2、在学生のための講演会

3、卒業時に各学科に桜楓会係の設置

4、卒業生の居住する支部長へ名簿の送付

など、新入会員入部に向けての努力も行っているのである。

しかし、在学中は友人もおり、ゼミもクラブも同好会もあり、桜楓会は「先輩の集りであり、特別身近な感じがしない」（新16）のは、むしろ当然といえるかもしれない。

そこで、一つ、視点をかえて、卒業、就職、結婚、子育て等一段落した層に、桜楓会への再加入を呼びかけてみてはどうだろう。

「あわただしい日を送り会費も未納。このアンケートを機に桜楓新報を読み、身近なものにしていきたい」（新

15）

こうした会員が多いのである。

新制大学下の第三期は、草創の雰囲気の残る旧制と、新制の若い層にはさまれ、両者の雰囲気をあわせもち、しかもかなり年代的に時間の余裕もあり、社会的活動、生涯教育への意欲のあふれるグループである。

この世代を桜楓会活動にくり込むことが、桜楓会の理念と、すぐれた大先輩の活動のあとを若い世代にひきつぎ、語りつぐ、かけ橋となれるのではないだろうか。

二つめは、支部一覧、支部名簿の作成、配布であり、

「転居通知を本部へ出したが、その地方の支部に連絡はしていただけないのでしょうか。自分で連絡するとしたら、どうやって支部を見つけるのでしょうか」（新19）

といった会員の質問に、何らかの解答、具体案を示すことである。

三つめは、会員名簿の充実である。会員部（三三〇ページ参照）の努力にもかかわらず、名簿に完全を期すことは至難であるかもしれない。しかし、各学科では、毎年、あるいは隔年にクラス会を開いていることはほぼ確かであり、クラス会の当番者は、いちばん正確なクラスメートの住所録をもっているはずである。そのクラス会当番者と連絡をとれば（桜楓会係、回生幹事を通してなど）、住所の確認は決して不可能ではないように思われる。ちなみに今回のアンケート調査では、発送四、四二〇通のうち二七六通が住所不明で返送されている。

2

四つめは、

「地域ごとに状況が異りむずかしい点もあろうが、本部との交流を積極的に行い、本部も支部の要望にもっと応えてほしい」(27回)

といった要望に、どう応えていくか。

会員が母校を懐しみ、母校の恩師への思いは、文字どおりつもるものがあり、母校の教授の理解を得て、支部で講演会が開催できたら、それは文化交流の意味でも、どんなに大きな意義をもつことであろうか。かつて、母校の先生方は、地方で講習会を開き、「女性の高等教育の必要」を説き、女性啓蒙のために、支部とともに活動されたものである。

社会活動への参加の意欲、生涯教育学習へのこれだけの意欲を、桜楓会が、支部が一つにまとめることができたら、それこそ女性による社会の改革が、可能になるのではないだろうか。

「桜楓会はもっと世間に向けても活動とPRを」(新3)

と、社会に向けてのステップを望む声は多いのである。

その意味では、桜楓会活動の内容の充実はもちろんであるが、同時に就職指導の徹底が望まれる。中年層による再就職希望の声は高く、技術を習得することによって、より多角的な就職が可能となる現在である。

パソコン講習会が学園内に開講されたような時代性と、人材銀行のもう一歩の広がりが、ことに若い会員を桜楓会活動に参加させるきっかけになるのではないだろうか。

桜楓会内の組織固めをまずしたあとで、五つめに望まれるのは、当然ながら卒業生自身が桜楓会への認識を深めることであり、日本女子大学を卒業したことの自覚をもつことである。

母校には私学として、誇るべき独自の理念があり、校風がある。その理念を、成瀬先生のおしえを在学中に理解し、体得し、その実現の場として、桜楓会を正しく理解してもらうことである。そのためには、桜楓会はもとより、母校における積極的な協力を、ぜひにと希望しておきたい。

母校への思い出が、桜楓会への認識となり、桜楓会の活動の活発化が、母校へ還るのは、桜楓樹そのものの輪廻である。

母校の三大綱領への思い出が、桜楓会への親近感が、若い層の第五期を境に大きく下降するなかで、いちばん新しい卒業生の中から、母校や桜楓会を見直すきざしがうかがえる今日なのである。

八十一年こそ、その気運をつかむ絶好の機会なのである。

3

最後に。せめて何年かに一度、桜楓新報を会費未納であっても、全会員に配布することはできないであろうか。

かつて桜楓新報は、全卒業生に配布されていた。昭和三十年代、経済的事情で会費未納者への発送を中止しようとした時、当時の井上秀理事長は「成瀬先生は家庭週報は桜楓会のからだだとおっしゃった。週報があるから会員と桜楓会が一体となれたので、桜楓新報も同じこと。できるだけ全会員に送ってほしい」といわれ、発送中止に反対されたという。

経済的事情の窮迫で、とうとう未納者への送付を中止したあとも、一年に一回だけは、全会員に新報を送りつづけたという。そのため郵便料金節約のために、事務局員は自分の住む町の会員宅に、桜楓新報を宅配して歩いたという。

会員の増加の著しい今、それは夢物語であろうか。

しかし、桜楓会と会員をつなぐパイプが桜楓新報だけであり、一方に「アンケートによってはじめて桜楓会の活動を知りました。入会したいのですがどうしたらよいのですか」「桜楓新報を読みたいのです、送ってください」という声が若い世代に非常に多いことを考える時、八十年を祝う桜楓会にコミュニケーションの一層の強化を望んで、アンケート『桜楓会について』のまとめとしたい。

〈編集委員会〉

会員調査の実施にあたっては、母校文学部社会福祉学科非常勤講師・高月東一先生のご教示、母校女子教育研究所主事・一番ケ瀬康子先生のご理解のもと、同研究所山本和代先生、落合孝子先生、真橋美智子さん、河合慶子さんのご協力をいただきました。特にまとめにあたっては山本先生、落合先生のご指導、お励ましがなければ、完成は覚束なかったほどで、心から御礼を申し上げます。また、アンケートの集計には、母校計算研究所の二宮玲子先生のご協力をいただきました。手集計については、吉沢千恵子（新3史）、高橋富子、山内陽子、山本範子（以上　新5史）、米村克子（新5英）、清水ひかる、武内恵都子、富永美智子（以上　新6国）、平野新子（新11児）、猶場三保、斉間知加子、山田敏子（以上　新11国）、石原邦子（新11英）、村上薙子、中村幸（以上　新12史）、中井良子（新16史）の皆さまのご協力をいただきました。

ありがとうございました。

付記　『桜楓新報』同封のアンケートも集計を終わっており、順次同紙上に発表してまいります。アンケートをお寄せくださいました五千人余の皆さまにも、心より御礼申し上げます。

ご返送は9月10日までにお願いいたします。

	回	生	学	部・学	科			
No.								

桜楓会設立80周年記念・会員調査

『桜楓会80年史』出版委員会

ここには記入なさらないでください。

I　はじめに，桜楓会についてお伺いします。

質問1　あなたは桜楓会を身近に感じられることがありますか。あなたのお気持ちにもっとも近い記号を○でかこんでください。（S．A）　1 □

A．非常に身近に感じる　B．時々感じる　C．あまり感じない

質問2　＜質問1—A，B　身近に感じる＞に○をおつけの方に伺います。それはどんな時でしょうか。おきかせください。（F．A）　2 □

質問3　桜楓会は「会員のため，母校のため，社会のため」を目標に，下記のようなさまざまな活動を行っておりますが，あなたはこうした活動に参加されたことがありますか。参加された方はその活動の記号のすべてを○でかこんでください。（M．A）　3 □□□ □□□ □□□

A．桜楓会総会　B．成瀬先生ご命日および逝去会員追悼会
C．各種の講演会　D．各種の研究会　E．見学会
F．家庭工芸展　G．ホーム・カミング・デー　H．ゴールデン・パーティ

I．国際交流の会　　J．桜楓会バザー
K．ボランティア活動（手話・盲人のための朗読）
L．その他（具体的に　　）
M．活動に参加したことがない

質問4　こうした活動以外に，あなたはどんな活動があれば参加したいとお思いですか。ご希望をおきかせください。（F．A）　4

希望する活動＿＿＿＿＿＿＿＿

質問5　また桜楓会は，下記のような活動機関，施設の開放もしております。あなたはこうした活動，施設を利用されたことがありますか。利用された方はその活動，施設の記号のすべてを○でかこんでください（お子さん，お孫さん，知人の方のための利用も含めてお答えください）（A．M）　5

A．桜楓新報の発行　　B．桜楓会会員名簿の発行　　C．桜楓日記の発行
D．結婚相談　　E．人材銀行による就職・アルバイトの指導と紹介
F．桜楓学園での講座　　G．桜楓会保険代理部　　H．実業部　　I．食堂
J．桜楓会夏期寮（軽井沢三泉寮）　　K．桜楓会館の各室・ロビーの使用
L．その他（具体的に　　）
M．活動，施設を利用したことがない

質問6　こうした活動機関，施設以外にあなたはどんな活動，施設があれば参加，利用したいとお思いですか。ご希望をおきかせください。（F．A）　6－1

希望する活動機関＿＿＿＿＿＿＿＿　6－2

希望する施設＿＿＿＿＿＿＿＿

質問7　<質問3のM　**参加したことがない**，質問5のM　**利用したことがない**>に○をおつけの方に伺います。それはどのような理由からでしょうか。主な理由を**2つ**選び，○でかこんでください。（M．A）　7

A．上記の活動，機関，施設のあることを知らないので。

B．桜楓新報を読んでいないので，種々の活動について情報が不足しているので。
C．時間的に余裕がないので。
D．趣味，教養面で特に興味，関心のある企画がないので。
E．資格取得，単位認定など自分に役に立つ企画がないので。
F．遠くて，行事，活動に参加できないので。
G．参加したいが，外出が不自由なので。
H．その他（具体的に　　）

（桜楓会支部についてお伺いします。）

質問8　桜楓会支部ではいろいろと独自の活動を行っておりますが，これまでに，下記のような支部活動にあなたは参加されたことがありますか。参加された活動の記号すべてを○でかこんでください。（M．A）

A．支部総会　B．親睦会　C．講演会　D．研究会
E．講習会　F．見学会　G．ボランティア活動
H．その他（具体的に　　）
I．参加したことがない。

8

質問9　<質問8のI　**支部活動に参加したことがない**>に○をおつけの方に伺います。それはどのような理由からでしょうか。主な理由を**2つ**選び，○でかこんでください。（M．A）

A．近くに支部がないので。
B．近くに支部があるかどうかわからないので。
C．支部はあるが，案内がこないので。
D．支部はあるが，活動していないので。
E．時間的余裕がないので。
F．趣味，教養面で特に興味，関心のある企画がないので。
G．資格取得，単位認定など，自分に役に立つ企画がないので。

9

H．参加したいが，外出が不自由なので。
I．その他（具体的に　　）

質問10　＜質問9のA　**支部がない**，B　**支部があるかどうかわからない**＞に○をおつけの方に伺います。あなたは支部があればよいとお思いですか。（S．A）　10 □

A．支部があればよいと思う　　B．支部はなくてもよい
C．どちらともいえない

質問11　桜楓会，支部，その他への率直なご意見，ご希望をぜひおきかせください。（F．A）　11—1 □

★ 桜楓会について

11—2 □

★ 支部活動について

11—3 □

★ その他，ご自由に

質問12　桜楓新報についてのご意見，ご希望をおきかせください。（F．A）　12 □

II　あなたの現在のご生活について，おきかせください。

（生活形態などについてお伺いします）

質問13　ご結婚についてお伺いします。当てはまる記号を○でかこんでください。（S．A）　13 □

A．未婚　　B．既婚（現在，配偶者がある）
C．既婚（配偶者と死別，離別）

質問14　現在のご生活形態についてお伺いします。当てはまる記号を○でかこんでください。（S．A）

A．単身　　B．独身で，両親，きょうだいなどと同居　　14 □
C．配偶者，配偶者と子ども，または子どもと同居
D．３世代以上で同居
E．その他（具体的に　　）

（職業についてお伺いします）

質問15　現在，職業に就いていらっしゃいますか。あてはまる記号を○でかこんでください。　15 □
（S．A）

A．現在，職業に就いている。
B．現在は就いていないが，過去に就いた経験がある。
C．現在も過去も，職業に就いた経験がない。

質問16　みなさまにお伺いします。
現在職業におつきの方はその主な職業の種類について，イ）ロ）ハ）のいずれかの中で当てはまる記号を**１つ**○でかこんでください。
その他の方はニ）の中で当てはまる記号を**１つ**○でかこんでください。　（S．A）　16

イ）雇用者（官公庁，企業，学校などに勤務する給与所得者）　イ） □
A．官公庁，企業，学校などの管理職　　B．大学・短大教官
C．高・中・小・幼の教員　　D．前記以外の専門的技術的職種
E．事務的職種　　F．技能的職種
G．その他

ロ）自営業（ご自身が経営の責任者である方）　ロ） □
H．商工業　　I．農林・漁業　　J．自由業　　K．サーヴィス業
L．その他

ハ）家族従事者（経営者の家族の一人として同じ仕事に従事している方）　ハ） □
M．商工業　　N．農林・漁業　　O．自由業　　P．サーヴィス業
Q．その他

イ)，ロ)，ハ)の中の職業に○をおつけの方に伺います。
お差支えなければ，仕事の内容，役・職名をおきかせください。
（仕事の内容）　　（役・職名）

ニ）その他　　ニ）

R．主婦　　S．学生　　T．家事手伝い
U．無職（A～Tに属さない方）

ニ）の中の記号に○をおつけの方に伺います。パート，アルバイトをしておいでの方は，仕事の内容をおきかせください。
（仕事の内容）

質問17　＜質問16＞でA～Tまでに○をおつけの方に伺います。　17
パート，アルバイトも含めて，その就業形態で当てはまる記号を**1つ**○でかこんでください。（S．A）

A．常勤　　B．臨時（非常勤など）
C．パート（フルタイムではなく）　　D．アルバイト（内職を含む）
E．その他

質問18　＜質問15のB，C　**現在職業に就いていない**＞に○をおつけの方に伺います。現在就職の希望をお持ちでしょうか。（S．A）　18

A．希望している。　　B．希望していない。

質問19　＜質問18のA　**希望している**＞に○をおつけの方に伺います。
そのための準備をおはじめでしょうか。当てはまる記号を○でかこんでください。
（M．A）

A．桜楓会人材銀行に求職希望を登録してある。
B．職業安定所などの公的機関，その他の機関に就職を依頼している。
C．恩師，先輩，知人，友人に個人的に就職を依頼している。
D．まだ具体的に就職を依頼していないが，資格取得などの就職準備をしている。
E．就職のための活動はしていない。
F．その他（具体的に　　）

19 □□

（福祉活動，ボランティア活動など社会活動についてお伺いします）

質問20　あなたは各種の団体に所属したり，グループを作って社会活動に参加されたことがおありですか。当てはまる記号を**1つ**○でかこんでください。（学校P．T．A，町会など大部分の方が加盟している場合は特に役員として積極的に活動された場合のみ，ご記入ください）（S．A）

20 □

A．現在参加している。
B．現在参加していないが，過去に参加した経験がある。
C．現在も過去も参加した経験はない。

質問21　＜質問20のA　**社会活動に参加している**＞に○をおつけの方に伺います。その団体名を具体的におきかせください。（日本赤十字社奉仕団，ボランティアグループなど）（F．A）

21 □

団体名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

質問22　＜質問20のB，C　**社会活動に参加していない**＞に○をおつけの方に伺います。あなたは機会があれば社会活動に参加したいとお考えですか。（S．A）

22 □

A．参加したいと思う。　　B．参加したいとは思わない。

質問23　＜質問22のA　**参加したい**＞に○をおつけの方に伺います。あなたがお考えの社会活動とは，どんな活動でしょうか。（F．A）

23 □

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

質問24　あなたは社会活動以外に，何か公職（各種審議会委員，教育委員，公民館運営委員，民生委員，保護司など）に現在就いておいでですか。当てはまる記号を○でかこんでください。（S．A）

A．現在就いている。
B．現在は就いていないが，過去に就いたことがある。
C．現在も過去も就いたことがない。

24 □

質問25　＜質問24のA　**現在公職に就いている**＞に○をおつけの方はその公職名をおきかせください。（F．A）

25 □

公職名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

（生涯教育についてお伺いします）

質問26　"生涯教育"は，建学以来の日本女子大学の，桜楓会の理念ですが，あなたは現在，何らかの学習をなさっておいでですか。当てはまる記号を○でかこんでください。（S．A）

A．現在，学習している。
B．現在はしていないが，今後何らかの学習をしたいと希望している。
C．特に考えていない。

26 □

質問27　＜質問26のA　**学習している**＞に○をおつけの方に伺います。その学習形態，学習内容について当てはまる記号をすべて○でかこんでください。（M．A）

27イ）

イ）学習の形態

A．桜楓会による各種研究活動
B．ラジオ，テレビ，本による独学
C．グループ，サークル
D．個人教授
E．民間団体，企業の行う学級・講座
F．行政（市町村）の行う学級・講座
G．通信教育
H．専修学校や各種学校
I．大学への再入学，大学院への入学
J．大学，または大学院の聴講

K．その他（具体的に　　）

ロ）**学習の内容**

A．文学・歴史　　B．語学　　C．国際理解に関する問題
D．婦人問題　　E．消費生活に関すること（食品公害・暮らしの経済・法律など）
F．家庭生活（料理など）に関すること　　G．スポーツ，健康に関すること
H．職業技術に関すること（タイプ，翻訳など）　　I．趣味に関すること
J．その他（具体的に　　）

27ロ）

質問28　そうして学習して得たものを，あなたはどう活用しようとお考えでしょうか。おきかせください。（F．A）

28

質問29　＜質問26のB　**現在はしていないが，今後希望する**＞に○をおつけの方に伺います。あなたはどのような学習形態，学習内容をご希望でしょうか。おきかせください。（F．A）

29—1

学習形態

29—2

学習内容

質問30　あなたがいちばん関心をもっていられることはどのようなことでしょうか。当てはまる記号を**2つ**選び，○でかこんでください。（M．A）

A．専門的な学問分野の研究や学習　　B．芸術，芸能，趣味的活動
C．旅行，スポーツなど　　D．家庭生活や家族のこと
E．社会活動（団体活動，ボランティア活動など）　　F．職業生活
G．宗教，その他精神生活に関すること　　H．健康の問題
I．その他（具体的に　　）

30

『桜楓会80年史』編集にあたって，参考までにお伺いします。

1）あなたは日本女子大学の教育理念である「信念徹底」「自発創生」「共同奉仕」の三大綱領を思い出されることがおありですか。

A．よく思い出す　　B．時々思い出す　　C．あまり思い出さない

1）□

2）＜1）のA，B　**思い出す**＞に○をおつけの方に伺います。それはどんな時でしょうか。

2）□

3）学生時代のもっとも忘れがたい思い出について，ぜひお聞かせください。

3）□

4）最後にお願い申し上げます。あなたの同期の方，同級の方，支部の会員の方で，社会的にご活躍中の方がいらっしゃいましたら，ご紹介ください。

（回生）　　（氏名）　　（お仕事の内容）

ありがとうございました。ご回答は大切な桜楓会の資料として，これからの活動にいかしてまいります。

桜楓会80年史

昭和五十九年四月二十一日　第一版発行

発行者　桜楓会八十年史出版委員会

発　行　社団法人・桜　楓　会

〒112　東京都文京区目白台二丁目八番一号
日本女子大学内

電　話（〇三）九四一・九六八八、七〇〇一

振　替　東京一―一〇三四〇

印　刷　共同印刷株式会社
東京都文京区小石川四丁目十四番十二号

©1984年　OFUKAI